
とある少女と紋章術師

みん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

とある少女と紋章術師

【Nコード】

N3910S

【作者名】

みん

【あらすじ】

ヒロインは初春飾利　！！　学園都市で生活する『紋章魔術』を操る少年と、正義の心を持って風紀委員の任務を日々まっとうする少女の成長を描く物語。　魔術という学園都市に相容れない力を持つ少年　秋葉康平あきはこうへいは、自らの存在を拒絶しかねない学園都市で暮らすため、力を押さえ込みひっそりと過ごすことを余儀なくされた。そんな彼の前に現れた一人の少女によって、康平の心境に変化が生まれる……………　2011年4月11日。僕の処女作である「とある双子の第二人生」がまだ終わっていないにも関わら

ず始まってしまった第2弾。今回はヒロインは最初から決まっています、あらずじ文頭にも書かれています。初春は比較的分け隔て無く、多くの人から愛されているキャラだと思いますし、何より萌える！……ということ、皆様、初春並みに優し
いお声で応援していただけると嬉しいです。既に書きましたが、まだ処女作も終わっていないので更新はゆっくりだと思えますが、僕にとって初めての本格的な魔術参加の話でヒロインは萌え初春、ということですので、長い目でお付き合い頂けると幸いです。

プロローグ（前書き）

あらすじにも書きましたが改めまして。

「とある双子の第二人生^{セカンドライフ}」を書いているみんなです。

詳しいことは後書きにまわしますが、この小説では「とある双子の第二人生」以上のニヤニヤ度を出せればいいなあ、なんて考えています。

では、どうぞ。

プロローグ

『学園都市』。

東京都の西部を中心に、一部神奈川県や埼玉県をその領域に含みながら東京都の中央3分の1を円形に占めているもので、「記憶術」「暗記術」という名目で超能力研究、つまり「脳の研究」を行っているというトンデモ都市である。

総人口は230万人であり、その内「授業の一環」として脳開発を受けているいわゆる『学生』は8割にも及ぶ。

脳開発以外にも科学技術には定評があり、外部よりも数十年は文明が進んでいる。

その違いは日用品から兵器に至るまで様々なところで見られ、特に樹形図ツリーダイアグラムの設計者と呼ばれるコンピューターは群を抜いている。

樹形図の設計者は超高性能な並列コンピューターであり、正しいデータさえ入力すれば完全な未来予測が可能という、フランスの数学者ピエール・シモン・ラプラスに言わせるところの『ラプラスの悪魔』。

そこからはじき出される結果は文字通り結果となり、確定事項となる。

天気予報も『予報』ではなく『予言』なため外れることなどなく、指定された時間の天気さえ気をつけていればそれによって被害を受けることなど皆無である。

さて、一見完璧な街に見える学園都市ではあるが、その実状は決して理想郷などではない。

むしろ、世界のどこよりも欲望と嫉妬の渦巻く、ある意味醜い街と言えるだろう。

まず欲望であるが、これは学園都市のみならず『研究』を行っている世界では当然、自然発生的に登場するものである。

強いて外の世界との違いを挙げるとすれば、実際に研究者たちが手を下しているかどうか、という違いであろう。

先ほども説明した樹形図の設計者のおかげで、研究者たちは実験の条件などの数値を入力するだけで容易に結果を得ることができるため、研究者達は実はあまり研究をしていない、という声もある。

もう一つの嫉妬というのはどちらかと言うと学園都市特有の産物である。

学園都市で生活を送る学生は、そのほぼ全員が何らかの「脳の開発」を受けて『能力』というものを得ている。

能力とは実に様々なものがあって一口には説明出来ないものがあるが、ある人は炎を操れたり、またある人は他人の心が読めたりする。

しかしそこには『強度^{レベル}』というものが存在し、レベル0からレベル5まで6段階の数値が設定されている。

例えば、同じ炎を操る能力者でもレベル1の人とレベル3の人が存在する、といった具合である。

そして、「学園都市は脳を開発し、学生に能力を発現させている」という聞こえはカッコイイうたい文句を並べてはいるが、学生の6割はレベル0、つまり落ちこぼれである。

学園都市は能力がすべての世界、レベル0の人間が学園都市から得られる奨学金などは高が知れているのである。

そこから生まれる高位能力者、あるいは世間一般に対する嫉妬による事件が、この学園都市では後を絶たないというのが実状である。

『白井さん、新たな情報です！ コンビニを襲撃した3人組は二手に分かれて逃走中！ 二人はその角を左に、残りの一人は右に進んでいます！ 既に右の道は封鎖済みなので白井さんは左の道へ行って下さい！』

「了解ですの！！」

白井、と呼ばれた少女は耳に装着している無線機から聞こえてきた声に従い、分かれ道を左に折れ曲がる。

彼女の腕には、彼女が風紀委員であることを示す腕章が取り付けられていた。

ジャツジメントとは学園都市における警察組織のようなものであり、構成員は学生である。

本来は校内の治安維持が対象の組織なのだが、もはやその設定は半ば形骸化しており、今では校外での活動も普通に行われている。(しかし始末書は書かされる)

白井は道が直線になり、先行して逃げているコンビ二強盗犯たちの姿を視界にしっかり捕らえると、フツと消えたかと思うと次の瞬間には強盗犯たちの目の前に現れた。

「わたくしから逃げようなど10万年早いすわね？」

「なっ!?!? 今まで走って追ってきてたかと思ったらテレポーター……ゲヘッ!！」

突如現れた少女に一瞬でも思考が停止してしまったのが彼らの運の尽き、次の瞬間には学生カバンではたき倒されたかと思うと、これまた突如現れた金属矢で、地面と服とを縫い合わされてしまった。

「少々鬼ごっこに付き合っただけですわ。それに……空^テレポーター間転移はここぞという時に使うのがミソですよ?」

白井は、二人が抵抗する素振りを見せないことを確認すると無線を開いた。

「初春? こちらの二名は拘束いたしましたわ。残りの1名は?」

『「ご苦労様でした。残りも秋葉さんが無事確保しました」』

「ではこれでこの一件は終了ですわね。……それにしても、秋葉さんも中々やりますわね。ジャッジメントとはいえレベル0、それであの検拳率なのですから。初春も、心強い騎士ナイトを手に入れましたわね?」

『からかわないで下さい!!』

「本当のことではありませんの。でもま、わたくしとお姉さまとの深い愛の域にはまだまだ達していませんわよ?」

『……白井さんのそれは、ちょっと違う気がします。とにかく、アクションスキルが連行の準備をしてそちらに向かっているの、白井さんはこちらに帰ってきて雑務を終わらせて下さい』

「……雑務、ですか。出来れば思い出たくありませんでしたの」

『サボらずにちゃんとやって下さいねー』

プツッ、と音がして通話が切れた無線機を耳から外し、「お姉さまに抱きついてこのストレスは晴らしますの!」と叫んで白井はレポートして消えた。

「今日もお疲れさまでした、康平さん」

夕方。

公園のベンチに腰かけていた秋葉康平あきはこうへいにそう言って缶ジュースを手渡してきたのは、頭に花をかたどった髪飾りをしている少女だった。

「ああ。ありがとう、飾利」

そう言っういはるて康平がジュースを受け取ると、飾利と呼ばれた少女初春飾利かざりはニッコリと微笑んで孝平の左隣に座った。

「それにしても、今日の黒子も帰ってきてからゲンナリしてたな」

「もう日常茶飯事ですよ。白井さんったら、始末書だって分かってるのに外の警邏ばかりするんですから」

そう言っういはるて、初春は苦笑いをしながらイチゴオレと書かれた缶を開ける。

「飾利はホントいちごが好きだな。この前なんか、暑いつてのに『いちごおでん』なんて買って買ったもんな」

「康平さんはアレだめなんでしたっけ？ ダシがしみてて美味しいんですよ？」

「いや、美味しいんだらうなっういはるてことは飾利の食べてる時の顔で分かるんだけどさ。なんて言うのかな、いちごがおでんに入ってるっういはる」

てのがそもそも良く分かんないんだよな。一度食べてみれば大丈夫なんだろうけど、最初の一步ってやつがな……」

「先入観……みたいなもんですかね？ 確かに外の世界じゃありえないかもしれないけど、康平さんも学園都市歴長いんですからそろそろ食べてみたらどうですか？」

「いやあ、斬新過ぎてちょっと……今度勇気がわいたらチャレンジしてみるよ。えっと、何の話をしてたんだっけ？ ああ、黒子の話か」

「ええ。まったく、始末書に追われる日々で大変ですよ」

「でも飾利は、そんな黒子を尊敬してる……だろ？」

「もちろんです。むしろ、白井さんと同じ職場で私は良かったと思っています。あんな、良くも悪くも尊敬できる人は白井さんだけですから」

「ハハハ、良くも悪くも、か。確かにな」

康平は飲み終わった缶を公園をたまたま巡回していた清掃ロボットに向かって投げつけた。

缶はちやうとロボットの正面に転がり、ロボが速やかに回収した。

康平はコントロール良く投げられたことに喜んだのか、「よしっ！」と声をあげて小さくガッツポーズをした。

そんな康平のことを、初春は微笑みを湛えた顔で見つめていたが、

自らも「えいつ」と言っただけでイチゴオレの缶をロボットに向けて投げた。

空き缶は無情にもロボットを通り過ぎ、それを見た康平は八八ツと笑った。

「相変わらず、飾利は運動とかになるとダメだなあ」

「え〜！？今の力加減でも十分だと思っただけけど……」

「もうちょっと鍛えた方が良くないの？」

「私は康平さんと違って情報処理専門だから良いんです！」

「そんなにムキになるな。ゴメンゴメン」

康平が謝ると（顔は笑っていたが）、初春は「もうっ」と言っただけで少しの間不機嫌そうな顔をしていたが、やがて昔を思い出す人のように遠くをボウツと眺めながら、

「鍛えると言えば、康平さんもジャツジメントの訓練を受けている時からずっと、身体を鍛えていますよね」

「ああ。飾利はもう知ってるけど、俺の力はむやみやたらに他人に見せられるものじゃないからな。力を使わずにジャツジメントとしてやっていくには、身体を徹底的に鍛えるしかないからな」

「少しも力を使ってないんですか？」

「肉体強化の術を使ったりはたまにしてるけど、炎や水を操る術は

使ってないよ。あからさまなものは極力使わないって決めてるしな」

「そうですね。……『魔術』、今でこそ実物を見ましたから信じられますけど、最初は信じられなかったなあ」

「そりゃそうだ。もし俺が飾利の立場でも、まったく同じことを思ったよ。外の世界ですら、『魔術が使える』なんて言ったら白い目で見られるんだ、まして学園都市っていう科学がすべての世界で魔術なんて言ったら社会的制裁を食らうこと間違いない」

康平はそう言つとベンチから立ち上がり、沈みゆく夕日を目を細めながら眺める。

「俺が今も魔術師でいられるのも、ひとえに飾利のおかげだ。能力開発、能力検査を受けていない俺のデータを飾利が改竄して『レベル0の秋葉康平』として存在させてくれるからな」

「康平さんにとって、魔術はただの力じゃないってことは私も十分分かってますから。事実、私もその力に何度も助けられましたし」

初春も立ち上がり、「そろそろ行きましようか」と言つて公園の出口に向かって歩き出した。

「帰りにスーパーに寄つても良いですか？」

「ん？ ああ、良いぞ。俺も何か弁当でも買つて帰るか」

康平が「どんな弁当にすっかなー」と考え出すと、初春は呆れた表情をする。

「またお弁当で済ませるつもりなんですか？ スーパーやコンビニの弁当、カップ麺じゃ身体に悪いから自分で何か作ってくださいって何度も言ってるじゃないですかー」

「そうは言ってもな……料理は致命的にダメなんだよなあ」

「料理が上手に出来る魔術とか無いんですか？」

「そんな魔術あつたら今頃何も苦労してないって。大丈夫、まだ若いんだしさ」

「もし若いうちから不健康になつたら、大人になったときに苦労しますよ？ ……しょうがないですねえ、今日は私が康平さんの晩ご飯も作ってあげます」

「え！？ いや、そこまでしてくれなくても……」

突然の申し出に康平が慌てて断ろうとすると、康平より身長の低い初春は下から顔を覗き込むようにして康平を見つめる。

「嬉しくないんですか？」

「い、いや！？ 嬉しいには嬉しいんだけどさ、その、迷惑じゃないのか？」

初春の上目使いに、康平は顔を少し赤くして顔をそむけた。

「迷惑なんかじゃありませんよ。どっちかって言うと、私は作りに行きたいです。……それとも、行っちゃいけない理由でもあるんですか？」

「いや、そんなものは無いけど……」

「良かった。じゃあ作りに行きますね？ 私はてっきり、康平さんが他の女の人を部屋に連れ込んでいるのかと思っちゃいましたよ」

「そ、そんなことするはずが無いだろ！」

「ですよー。さ、完全下校時刻になる前に買い物を済ませましょう！」

初春はニコツと微笑むと、康平の手を取り指を絡めて（俗に言う恋人つなぎ）走り出した。

「ちょ！？ 飾利、このつなぎ方じゃ走りにくいって！ おい、人の話を聞けー！！！」

康平は、半ば初春に引きずられるようにしながらバタバタと走り出した。

魔術、というものが存在する。

異世界の法則を無理矢理、現世界に適用し様々な超常現象を引き起こすことの出来る技術である。

学園都市で脳開発を受けて力を行使できるようになった『能力者』

に対抗するために生まれたものである。

厳密に言うとなんか能力者ではなく原石という、脳開発を受けずに能力を行使する「才能ある人間」に対抗するためのものなのだが、平たく言ってしまうと『能力』とは正反対の場所に位置するものである。（あくまで平たくであることを付記しておく）

そして、魔術を行使する人間のことを魔術師と呼ぶ。

秋葉康平も魔術師である。

魔術にも様々な形態が存在するのだが、彼が扱うのは『紋章魔術』と呼ばれるものであり、紋章魔術を扱う人間を『紋章術師』クレストンサーと呼ぶ。

一般に魔術は、行使する際に詠唱や魔法陣などの下準備が必要であり、発動に短くても数日、長ければ数年から数十年という時間を必要とするものが多数存在する。

そのため、魔術師同士の戦いでは下準備がメインであり、そこでの戦いに戦力・戦略を整え相手の魔術に対する策を講じるかが大切となるのであるが、残念ながらその貴重な時間を取れない戦いというものもまま存在してしまう。

そこで当然ながら、いかにして発動時間を短縮できるか、ということが考えられるようになった。

康平の扱う紋章魔術は、その時間短縮という観点から見ると極めて優れた学問である。

紋章魔術とは、あらかじめ4つの属性の意味を込めた紋章の書かれた紙を各2枚ずつ、計8枚用意し、それらの属性の組み合わせにより様々な術を発動させるというものである。

4つの属性とは炎・水・地・風であり、紋章術師はたったこの4要素の組み合わせだけで魔術を行使することができる。

しかし、8枚の紙があればどこでも魔術を行使できるというものではない。

正確には、『基本的にはどこでも行使できるのだが、術者の存在する場所の4要素の濃度によって威力が変わる』というものである。

例えば、術者が水辺の近くで紋章魔術を行使する場合、水を示す紋章を使った魔術は威力や効能が普段より増大するが、逆に炎を示す紋章を使った魔術は威力などが減退する、という具合である。

このように、使い勝手が良いような悪いような魔術を行使できる人間、それが秋葉康平なのである。

そんな学園都市において特殊な存在である秋葉康平であるが、彼の学園都市生活を心身共に支えている存在、それが初春飾利である。

二人の出会い、そして成長は決して優しく温かいものではなかった。

それは、康平の魔術師であるという立場をはじめ様々な出来事が

二人の前に立ちはだかつてきたからであった。

これは、科学の街に住まう魔術師と、その魔術師と出会い惹かれていく一人の風紀委員の少女の物語である

プロローグ（後書き）

さて、始まってしまいました（？）。

この小説は処女作である「第二人生」以上に難しい（僕にとって）作品になりそうです。

こちらの小説ではヒロインが初春という比較的知名度がありファンの方も多いということ、主人公が魔術サイドの人間であること、が主な理由でしょうか。

魔術サイドって書きにくいんですよ……（第1話にして早くも弱気w）

それでも、構成としては前から頭の中にあつた話なので（第二人生と紋章術師を同時に考えてる自分……頭の中』とある』だらけですわw）、頑張って書いていきたいと思えます。

更新は遅めが多大に予想されますが、何とぞよろしくお願いいたします。

感想もどしどしお待ちしております（主に初春についてw）

出会い

時がさかのぼること6年前。

その日、冥土帰し（ヘヴンキャンセラー）は当直のため、一人当直室で夜を過ごしていた。

冥土帰しというのは彼の医療技術を称した異名であり、患者がどんな病気や怪我を負っていてもあらゆる手段を用いて治療してしまう。

その異名は伊達ではなく、今まで行ってきた手術はすべて成功させてきた。

さらに彼の評判を押し上げているのはその医療スタンスである。

彼は、担当する患者が裕福な家庭の人間であろうと貧乏な人間であろうと、分け隔てなく治療を施す。

よくドラマに登場するような悪徳医師とは正反対の人間である。

『先生、親子の急患です』

「ん、分かった」

当直室のパソコンでデータの整理を行っていた冥土帰しは、その一報を受けるとカップに残っていたコーヒーを飲み干し立ち上がった。

た。

「（親子の急患か……珍しい）」

冥土帰しはそんなことを思いながら、夜の病院を一人歩く。

学園都市の人口比率は、『学園』という2文字が示すとおり極端に若い世代に片寄っていて、冥土帰しのような歳の過ぎた人間は数がそこまで多くない。

しかも、人口の大半を占める子供たちはそのまた大半が一人暮らしであり、両親と共に暮らしている学生はレアな存在である。

「（一体何が……？ とにかく、僕は出来ることをやるだけだ）」

材料無き推測は医者にとって禁物である。

冥土帰しはそれ以上の憶測を止め、親子がいる処置室へと向かった。

冥土帰しが処置室のドアの前に立つと、スライド式の電動ドアが静かに動き、せわしなく動き回っている看護師たちの姿が目に見え込んできた。

中に入ると、一人の看護婦が冥土帰しに近付いてきた。

「急患の二人の様子は？」

「はい。父親も息子さんも目立った外傷はありません。巡回ロボが道端で倒れていた二人を発見し病院に自動通報してきた、というのがいきさつです。今は点滴を行っていて二人とも安静にしています」

説明を受けた冥土帰しは、事態がさほど深刻ではなかったことに胸を撫で下ろしつつ急患である二人のベッドに近付いた。

冥土帰しはまず男の子の様子を確認した。

自分が病院にいることなど露知らずといった感じで、気持ち良さそうに眠っていた。

「（ふむ……年頃は5・6歳といったところか。目立った外傷も無いし、こんな子供をわざわざ起こして話を聞くこともないだろう）」

冥土帰しは眠っている男の子のベッドを離れ、今度は父親のベッドへとやってきた。

そこで冥土帰しは、男の子には無かったある違いに気付いた。

「（この父親、真新しい外傷は無いがあちこちにあざや古傷のようなものがある。顔の様子からしても、息子と違ってやや衰弱気味だ……）」

冥土帰しは直前までこの父親を担当していた看護師を呼び寄せた。

「この二人の身分を証明するものを見せてくれ」

学園都市に在住している人間には、学園都市から身分を保証するICカード式の特種な身分証明証が発行されている。

外界で言うところの住基カードのようなものだが、データとして氏名や住所・年齢の他にレベルなどが登録されており、これが無いと学生は奨学金が得られなかったりと色々と不便なことになる(というより、様々な厳しい制約が付くため事実上生きていけない)。

そのため、学園都市に籍を置いている人間はほぼ全員が持っているはずなのだが……

「……先生。この二人は学園都市身分証明証を持っていませんでした」

「……何だと？」

看護師のその言葉に冥土帰しは耳を疑った。

「いえ、身分を証明するものを持っていなかった訳ではありません」
そう言って看護師がポケットから取り出したのは、銀行の通帳らしきものとパスポートだった。

冥土帰しはそれを見て再度考える。

「(パスポートは持っているのに学園都市身分証明証は持っていないということは、考えられるのは学園都市外部の人間だということだ。通帳に記されている銀行名は、日本全国に支店のある大型銀行だから学園都市内でも預金の引き出しなどは出来る。しかし、と言うよりなおさら、何故この二人は学園都市にいてかつ倒れていたん

だ？」

通帳の残金を見ても、衰弱するほど生活に困っているという訳でもない。

むしろ、よくこんなに貯めたなと冥土帰しが驚くほどの金額であった。

どうしたものと冥土帰しが考えあぐねていると、父親の目がゆつくりと開いた。

開いた目はキョロキョロと辺りを見渡し、冥土帰しを見るとピタッと止まった。

「……ここは、どこですか？」

父親はゆつくりと、疲れが見え隠れする口調で冥土帰しに聞いた。

「ここは、第七学区総合医療センターだ。二人は、道端で倒れているところを巡回ロボに見えられたんだね？」

「……ということは、ここはまだ学園都市か……」

か細い声で呟いた父親の言葉を、冥土帰しは聞き逃さなかった。

「（今の言葉からしても、この二人が学園都市に住んでいる人間ではないことは明らかだ。何があった……？）」

冥土帰しは処置室にいた看護師たちに、「悪いが、少し席を外してくれませんか？ 何かあればその都度呼ぶから」と声をかけた。

看護師たちはその声を聞くと、何も言わず黙ってその場を離れた。

冥土帰しは、処置室に自分と父親、眠っている男の子の三人以外誰もいないことを確認すると父親の近くに腰かけた。

「さて、と。本来医者である僕が根掘り葉掘り聞くことではないことは承知の上で、いくつか質問させてもらうけどよろしいかな？」

「……分かりました」

冥土帰しの真剣な顔つきを見た父親も、彼が単に興味本位だけで聞いてくるのではないと察したのか、拒否することなく了承した。

「まず、いきなり確信を突くような質問だけど、君たち二人は学園都市の人間ではないね？」

「はい」

「では、何故学園都市にいて、しかも倒れていた？通帳を見る限り、生活に困っているという訳ではないようだから、少なくとも空腹で行き倒れていた、という訳では無い様だが」

「……………」

その質問に、父親は黙秘で答えた。

「言えない、ということだね？ まあ、学園都市に入ること自体はパスポートがあれば可能なのだから、二人が学園都市にいることについては不審な点はない。しかし、倒れていたとなれば話は別だ。」

「黙秘も結構だが、そうなるに僕は君たちをアンチスキルに引き渡さなければならぬんだね？」

「アンチスキル……ああ、学園都市の警察組織のことでしたか」

「そつだ。もし君たちの素性にやましいことが無いのなら是非事情を話してくれないかな？ もし二人が望むのなら、このことはアンチスキルに通報せず君たちを学園都市外に解放してあげてもいい」

「……一介の医者であるあなたに、そのようなことが出来るのですか？」

「僕を誰だと思っている？ こう見えても、学園都市では『ヘヴンキャンセラー』という異名で知られている。自慢じゃないが、患者のためなら何でもするというのが僕のモットーなんだね？」

「ヘヴンキャンセラー……なるほど、どうやら黙秘という天国へは簡単には行かせてもらえそうにない」

「話す気になってくれたかな？」

父親は冥土帰しの言葉を受けてしばらく目をつぶっていたが、やがてフーッと息を吐いた。

「……仕方ない、私だけの問題なら絶対に話さないことなのだが、息子の命がかかっているとすれば話は別だ」

「命……だと？」

その父親の言葉に、冥土帰しは早速反応を見せた。

「息子さんは、何かの病気にでも？」

「いや、そうではない。……私たち親子は、命を狙われているのですよ」

「何だと？ いや、ちょっと待って欲しいんだね？ 二人は学園都市に在住している人間ではない、ここまでは良いかな？」

「ええ」

「じゃあ、学園都市の路上で倒れていたのは、追われていたからという認識でよろしいかな？」

「よろしいも何も、その通りなんですよ」

「だとすると、二人を追っているのは、あるいはその関係者でもそうだけど学園都市内部の人間ということかな？ 学園都市外部の人間はいくら外でプロぶついても、学園都市内部では素人同然だ、すぐにアンチスキルかジャッジメントに見つかるのが大体のオチだからね？」

「学園都市の内部は外部とはまったくの別世界だと言っても過言ではない。」

「いくら、外の世界で優秀な訓練を受けた軍人のような人間でも、学園都市の構造や知識が頭の中にないとただの一般人とほとんど変わりが無い。」

もし二人を追い回しているのが外部の人間だとしても、内部の人

間から学園都市に関する情報をもらっている可能性が高く、やはり内部の人間が関わることになる。

つまり、追っているのが誰であれ、どのみち学園都市内部の人間が関与している、と冥土帰しは考えた。

しかし……………

「いえ、恐らく私たちが追われていることと学園都市は関係ないと思います。というより、私たちは誰に追われているのか分かっていきますから」

予想外の答えに、今まで様々な患者を相手にしてきた冷静さを欠かさないことに定評のある（そうでないと医師は務まらないが）冥土帰しも驚いた。

「待ってくれ。学園都市とは関係のない連中に追われていて、しかもその犯人たちの正体を知っている？アンチスキルとかには通報していないのか？」

「ええ、していません。相手が相手ですから…………… 学園都市までくれば追ってはこないだろうと踏んでたんですけど……………」

「相手……………？」

冥土帰しは今の父親の言葉にひっかかりを覚えた。

今の口ぶりからすると、この父親は学園都市が外界とはまったく違う場所であることを利用してわざわざここに逃げてきた、と解釈できる。

そして、二人を追ってきている犯人らにとって学園都市は何か不都合な場所であるとも解釈できる。

学園都市の存在を不都合に感じている人間や組織は全世界に少なくない。

列举すればきりが無いが（日本政府ですら、学園都市を良くは思っていない）、その中でも学園都市、つまり科学とはまったくの正反対に位置する勢力が存在するのを冥土帰しは知っている。

その昔、冥土帰しはその勢力にいた人間を一人助けた。

その人間は現在学園都市の最大権力者である、学園都市統括理事長というポストに位置している。

「（学園都市で自由に行動でき、二人を追い掛け回すことの出来る存在……まさか）」

冥土帰しは窓の外をチラッと見る。

その視線の先には、人口の光に照らされた『窓の無いビル』があった。

「（まさか……）」

ありえない、と思いつつも、何が起るのか分からないのが学園都市。

「その君たちを追っている連中、まさか……『魔術師』なんて名乗

ってないよね？」

ここで父親が「は？魔術師？」というような反応を見せることを、冥土帰しは期待していた。

しかし、今度はその言葉を聞いた父親がガタツと飛び起きた。

「どうして……どうして学園都市にいる先生が、魔術師の存在を！？」

冥土帰しの期待は見事に打ち砕かれた。

「（……本当にそうだとはね。子供を巻き込んでこんなことになるとは。それとも……これも君のプランの一つかい？アレイスター）」

窓の無いビルの中。

床から天井まで届く巨大なビーカーが置かれた一室がある。

中は液体で満たされていて、そこに、緑の手術衣を着て逆さまに

なつて浮かんでいる一人の人間がいる。

穏やかな笑みをたたえ、外見だけでは男とも女とも分からないその人の名前は、アレイスター・クロウリー。

学園都市の創設者にして、歴史に名を残す大魔術師である。

「(ふむ……)」

アレイスターは、どういう技術なのか、ビーカー内に映し出された映像を見ていた。

「(紋章術師、か)」

その映像には、冥土帰し・冥土帰しと話している男・その男の息子が映し出されていた。

「(まるほどなるほど、これは面白い。まだプランが本格的に始動していない今、余興として楽しむには十分か)」

魔術界を揺るがすほどの影響力を持っていたアレイスターにとっては、二人から感じられる魔力など微々たるものであり、アレイスターの進行中である『プラン』に何らかの影響を与えとは思えない。

しかし、紋章術というのは魔術界でも滅多に見られるものではなく、しかもその存在は魔術界にとって決して良いものではない。

「(確か、紋章術は様々な魔術形態の中でも宗教色の薄い学問……それゆえ、魔術界から抹殺しようとする動きもあるとか。その動き

が本格的になってきた、ということか」

アレイスターは、しばらくのあいだ冥土帰したちの会話を眺めていたが、やがて視線をベッドで眠っている息子の方へとむけた。

「（この子は……これから、少しは楽しませてくれよ？）」

アレイスターはフフッと笑うと映像を切った。

出会い（後書き）

そういえば、今話で僕の両小説を通じて初めてアレイスターを書きました。

アレイスターが登場すると物語が壮大に展開していきそうな予感をさせますが、そんなことはありません（汗

ですので、その辺りだけは期待せずにお楽しみください。

春と秋

「じゃあなーこうへー！！ また明日なー！！」

「おうー！！」

友達の輪から離れて、一人保育園のような建物から出てくる少年の名前は秋葉康平。

1年前にこの学園都市にやってきた少年である。

彼が出てきた建物の名前は『あすなる園』、学園都市で問題になっている『置き去り（チャイルドエラー）』を保護する施設である。

置き去り。

学園都市に存在する「入学した生徒が都市内に住居を持つ」という制度を利用し、入学費だけ払って子供を寮などに入れ親はその後行方を眩ます行為、およびそれによって一人になった子供のことを指す学園都市特有といってもよい言葉である。

そこから出てきたということは彼もまた置き去りなのだろうと世間の人は思うのだろうが、彼はどっちつかずの存在である。

まず、「親が行方を眩ます」という部分に関しては、眩ますという言葉が正しいかはともかく親が息子を学園都市に置いて出て行ってしまったのは紛れもない事実である。

それは「行方を眩ました」と同義じゃないのか、という声が聞

こえてきそうであるが、そうではない。

彼の親は学園都市から出て行ってしまったが、彼には親代わりとなつて彼の面倒をみている男がいる。

ピピッ！…ピピッ！…

康平はポケットの中で鳴っている端末を取り出して通話モードにした。

「はい。何か用か先生？」

「うむ。今日は定時で家に帰れそうだから、僕の分の食材を買ってきてもらうのを伝えようと思ってね？」

「オッケー。ちょうど今あずなる園を出てスーパーに買い物に行くところだったんだ、良いタイミングだぜ。あ、でも二人分の金持つてねーな……ATMでおろすか」

「すまんね。頼んでも大丈夫かな？」

「いいっていいって。先生は病院の中でも一番の腕なんだろ？普段は忙しくて一緒に飯なんて食べないからな。これくらい気にすんなよ。じゃあなー」

康平は通話モードを切ると、進路をスーパーからATMのあるコンビニへと変更した。

彼が今電話で会話していた相手こそ、彼の現在の保護者である医者、冥土歸し（ヘブンキャンセラー）である。

冥土歸しは1年前、彼共々病院に運ばれてきた彼の父親から彼を預かってほしいと頼まれた。

それで、康平は冥土歸しの住んでいるマンションの隣の部屋を借りて生活している、という具合である。

しかし、康平は冥土歸しに引き取られた時点ですでに年齢的には小学1年生と同じであり、今は小学2年生として学校に通っていないわけにはいけないはずなのだが、なぜ置き去りの保護施設であるあすなる園に通っているのか？

それは、彼特有のとある事情が関わっていた。

「よし、現金の引き出しは終わりっ……早いところ買い物済ませて帰るとすっか。ま、買い物とは言っても出来上がってる惣菜ばかりなんだけど」

コンビニから姿を現した康平は当初の目的地であるスーパーへとむかって走り出した。

時間はちょうど夕方、学校帰りの学生たちで道が若干混みはじめの時間帯である。

「今日も今日とて学生の多いことで……まあ、学園都市なんだからしゃーないっちゃしゃーないけど。んじゃ、ここはいつもの通り大通りを避けてっど……」

人の多いところをダラダラ歩くのが好きではない康平は、普段から混雑時間帯には大通りを避けて細い路地裏を進むようにしていた。

もちろん、康平と同じことを考える人間は他にもいるわけで、いくら路地裏を通ったとしても誰にもすれ違わないわけではない。

しかし、康平は自らの体の小ささを利用してそれを難なく通り抜けるため、すれ違う人間は康平の障害とはならない。

結果、大通りを通るより早くスーパーにたどり着けるため康平は毎日裏通りを利用している。

……が、この日は少々様子が異なっていた。

「……？ なんだあ？」

路地裏を走っていた康平はその足を止めた。

康平の前方、一人の男と一人の少女が康平に背中を見せる形で道をふさぐように立っていたからである。

「おいおいマジかよ……面倒くさいなあ」

引き返そうかとも思ったが、康平はすでに路地裏の半分程度まで進んでおり、今更引き返すのもためらわれた。

「しゃーない。邪魔だろうけど通らせてもらうか。邪魔なのはどっちかって言うとあの二人だけだな」

路地を通り抜けることを決めた康平は、道をふさぐ様に立っている二人に近づいた。

……とその時、康平は二人が何やら話しているのを耳にし、エアコンの室外機の陰に隠れて聞き耳を立てた。

別に盗み聞きをしようなどと最初から思っていたわけではなく、二人のうち男の口調がやや激しいことに気付いたからであった。

「（なんか厄介な場所に立ち会った気がするぜ……親子喧嘩でもやってんのか？）」

息を殺して耳をそばだてると、男のセリフが聞き取れた。

「おいおいお嬢ちゃんよー。俺は正しいことを言ってるつもりなんだけどなあー？」

「そ、そんな……」

「（……？ 親子喧嘩じゃあなさそうだな。じゃあ何だっただった？ たく、面倒くせえ……）」

これではわざわざ路地裏を選んだ意味が無くなってしまっ、そう考えた康平は室外機の陰から出ると二人に近づいた。

「あの一、すみませーん」

「あん？」

二人に近づいた康平はそれぞれの姿をそれとなく見る。

男の方は若干ガラの悪い感じの青年で、まあどこにでもいる男かと康平は思った。

一方少女の方は、康平と同じころの年頃で頭に一輪の花がついた花飾りをつけていた。

「（どうみても親子の年齢差はない……面倒事かなあ……？）何かあったんですか？」

康平が尋ねると、男が面倒くさそうに説明を始めた。

「どうしたもこうしたも、俺がこの路地を歩いてたらこのお嬢ちゃんすとすれ違ったわけよ。その時、このお嬢ちゃんがぶつかってきたから謝ってくれただけの話」

「なんだそんなことか……だったら、ほら、このお兄さんに謝ってね？ここで意固地になっても話は進まないんだからさ」

さつさとこの問題を解決してここを通り抜けた康平は、今の男の話の聞いて女の子に謝るように声をかけた。

康平の促しに、花飾りをつけた女の子は顔をあげた。

これで女の子が謝り、無事にこの路地を通過できる、康平はそう思ったのだが……

「ち、違つんです。私がぶつかつたんじゃないんで、この男の人がわざと私にぶつかるようにして歩いてきたんです!！」

「えっ!？」

「おいおいお嬢ちゃんよお! この期に及んで責任逃れはないんじゃないかねえかあ!?!？」

予想外の言葉に思わず声をあげた康平と、その女の子の言葉に怒りを見せる青年。

だが少女は、それにひるまずさらに言葉を続ける。

「嘘だと思うのならジャッジメントなりアンチスキルのところに行きましょう! そこで監視カメラの映像を確認すれば分かるはずですよ! 監視カメラが不満なら人工衛星の映像でも良いんですよ? あれなら角度的にも問題ないでしょうし」

「お、おいおい……」

怒る青年に続けて言葉をぶつける少女に、康平はなんとかなだめてこの場を収めようとするが……

「この……なめやがってクソガキ!! こっちがおとなしくしてりやつけあがりやがって!! 一発痛い目あわせてやるうかあ!?!？」

逆撫でされた(少女の言葉が正しいなら逆切れだが)青年は、そのごぶしを振り上げて少女めがけて振り下ろした。

それを見た少女は手で顔を覆い、とっさに防御態勢をとって衝撃

に備えた。

だが……

バシィッ！！

衝撃音はしたものの、少女に殴られたときの衝撃が走ることはなかった。

「……？」

不思議に思った少女が手をどけて恐る恐る青年の方を見ると……

「えっ！？」

今度は少女の方が声を上げた。

それもそのはず、体格で圧倒的に勝っている青年の拳を、先ほどの少年（＝康平）が片手一本で抑えていたのだから。

「なっ！？」

一番驚いたのは誰であろう拳を止められた男本人である。

「ば、バカな……ガキが片手で俺の攻撃を止めただど！？」

男はつかまれているこぶしを振り払おうとするが、康平の手はほどけない。

「なんだこのガキ……！ 能力者か！？」

「俺が能力者かどうかなんてどうでもいい。問題なのは、アンタが嘘をついてこの子を脅し、あげく暴力に訴えようとしたことだ」

「俺が嘘をついたかどうかなんてお前には分からねえだろうが！このガキの方から俺にぶつかってきたんだよ！」

「もしそうだとしても、暴力に頼った時点でアンタの負けだ。第一、暴力を振るおうとした時点でアンタは自分の非を認めたとようなもんじゃないのか？」

「く……クソがつ!!！」

康平に言いくるめられた男は空いているもう片方の手で康平を攻撃しようとした。

それを見た少女は再び手で顔をおおった。

直後………

ドスツ!!!

鈍い音が狭い路地に響き渡り、さらにドサツという地面に何かが倒れる音が続いた。

少女は、康平が男に殴られ地面に倒れたと思い、男の存在も忘れて顔を守っていた手をどけて地面を見た。

しかし、そこにあつた光景は少女が想像していたものとはまったく違うものであつた。

「まったく……パンチを片手で止められた時点で攻撃なんざ止めておけばこんな目にあわずに済んだのに……」

「……嘘、ですよ？」

少女の口から、信じられないといった感じが見え見えの言葉がもれる。

そう、地面にひれ伏していたのは康平ではなくあるうことが男の方であった。

「ま、自業自得ってやつ？ それはいいとして……君、大丈夫？」

男の気絶を確認した康平は少女の方へと向き直った。

「え？あ、はい……」

「そう、なら良いんだ。それにしても、君はなかなかすごい女の子だね」

「？ どういう意味ですか？」

「こんな怖そうな男の前で、『あなたが悪いんです』なんてよく言えたなつてこと。普通ならビビッてそんなこと言えないだろ？俺が通りかかってチャンスだと思ったから言ったんだろうけど、俺みたいな子供なんて味方にしたところで何の足しにもならないし」

「いえ、誰かが通りかからずとも私はこの人にむかってさっきみたいに言っていたと思います」

「へえ……じゃあ余計にすごいな。こつこつのを『肝が据わってる』って言うんだっけ？」

「いえ、肝が据わってるだなんてそんな……私は当然のことをしただけです。むこうからぶつかってきたんです、こつちが悪者にされるいわれなんてありません」

「……君、能力者？」

康平が尋ねると、少女は首を縦に振った。

「はい、といってもレベル1ですけど。能力は触れているものの温度を一定に保つというもので、『サーマルハンド定温保存』って言うんです」

「ふうん……いや、あまりに肝が据わってるもんだから、もしかしたらレベルの高い能力者で実はこの男をボコボコにできるくらい強いんじゃないかって思ってます」

「私は、間違っているものは間違っているって言わないと気が済まないタイプなんです。ですから、例えばそれを言う相手がどんなに悪い人でも私は臆せず言うって決めてるんです」

「俺には絶対に真似できないことだよ。俺ならさっきみたいに力にすぐ頼っちゃう。君、名前は？」

「私ですか？ 私は初春飾利って言います。『初めての春』に『飾るの漢字の部分と利口の利』で初春飾利、です」

「初春飾利……か。その頭についてる花飾りの髪留めと合わさって

てとっても良い感じの名前だね」

「そうですね？ありがとうございます。あなたのお名前は？」

「俺か？俺は秋葉康平っていうんだ。……つと、ごめん初春さん、俺買い物の手定だったんだ。今日は普段一緒に飯食わない人と一緒に食う予定があるから早めに準備しておかないと。この男は……放っておいてくれると助かるな。アンチスキルに引き渡してもいいけど後で俺が事情聴取を受けることになっちまう。それは嫌なんだよな。じゃあな！！」

「あ？え？ちよつと!?!？」

初春が呼び止める間もなく、康平は倒れている男を飛び越えると角を曲がり表通りへと駆けて行った。

「ま、待って下さい！まだお礼も……」

慌てて後を追って大通りへと出た初春だったが、そこはすでに学校帰りの学生や、学園都市ゆえ数は少ないものの会社帰りのサラリーマンやOしたちで埋め尽くされ康平の姿を発見することはできなかった。

「はあ、見失っちゃいましたか……それにしても、私と同じくらいの歳だったと思うんだけど、強かったなあ。どのくらいのレベルの能力者だったんでしょうか？おそらく肉体強化系だと思うんですけど……」

流れる人ごみを見つめながら小さな声でつぶやく初春。

「（でも、最後に言った『アンチスキルに事情聴取されるのは嫌』ってという言葉はどういう意味なんですか？ やましいこともなく、逆に人助けをしたのにアンチスキルに話を聞かれるのは嫌っていうのは意味が分かりません。もしかして、ああ見えて悪い子だったりして……）」

そう考えた初春であったが、すぐに首を横に振った。

「（いえ、あのような人に限ってそんなことはありません。……調べてみましょうか）」

康平に倒された男をどうするかしばし考えた初春。

アンチスキルに通報すれば男を倒した康平も話を聞かれることになり、その時なら康平にも難なく会えるだろう。

だが、その当の本人は通報され事情聴取されることを面倒がっていた。

「（……私らしくないですが、通報するのは止めておきましょう。その方が今度彼に出会えた時に彼と話しやすいですし）」

男を放置することに若干罪悪感を感じる初春であったが、それを上回ったのは康平に対する好奇心であった。

「（彼は私のことを強いと言ってくれましたが、私から見れば彼の方が十分強いです。私なんて、ちよつと機械がいじれるだけで力なんてありませんから。間違っていることを指摘せずにはいられない性格なのにそれに見合うだけの力のない女です）」

初春も路地を出て喧騒の中に入り込む。

「（とにかく、彼にもう一度会いたいです。でも、どこの学校に通っているかも聞かないなんて失敗でした。手がかりは名前だけ……ですか。仕方ないですね、しばらくはあの路地の近くを重点的に見てまわりますよ）」

初春の頭の中は、ろくな力もないのに自らのことを強いと言ってくれた康平のことでグルグルとまわっていた。

「ふう……慣れないことしちゃったな。人前で魔術使ったの久しぶりっていうか、学園都市に来てからは初めてか……？」

少女から逃げるように去った康平は、当初の計画通りスーパーに入り適当惣菜を選びながらつぶやいた。

「後はあの初春って子がアンチスキルに通報してなければなお良いんだけど。この歳で小学校に通ってない、あげく能力開発を受けてないなんて知られたら流石に厄介だしな」

康平の歳、小学2年生相当ともなれば置き去りの施設から離れ、奨学金をもらい小学校に通うのが普通である。

しかし、それとて絶対ではないのでその点では怪しいことではない。

問題なのは、『学園都市にいなながら能力開発を受けていない』ことであつた。

学園都市に住んでいる児童・生徒・学生は能力開発を受けることが絶対条件であつた。

もちろん置き去りの施設に通っている子供も例外ではない。

しかし、康平には絶対に能力開発を受けられない理由があつた。

それこそが、先ほど康平がつぶやいた言葉の中に含まれていた『魔術』という言葉である。

康平のような魔術を扱うもの　魔術師は、能力開発を受ける
と体に尋常ではない影響が出てしまうのだ。

具体的には、能力を使えるようになる代わりに魔術を使おうとすると死に至るような負荷が体にかかり、あっという間にあの世行きとなってしまう。

しかも、そのような大きな代償を払って能力を手に入れてもレベルが低くは意味がない。

もちろん康平も、学園都市に住むにあたってそのリスクを負ってでも能力開発を受けるかどうか考えはした。

その結果、『体を犠牲に能力を手に入れてもレベルが低い可能性があるのなら、いつそ能力なんていらぬ』という結論に至った、というわけである。

しかし、能力開発を受けていないがゆえに小学校に通えない、それが康平がいまだにあすなる園に通っている理由であった。

本来ならあすなる園にすら入れられないのだが、冥土帰しが何とか手をまわして通えている。

しかし、小学校に入るときには置き去りの施設に入るときより厳しい個人情報審査があり断念したのである。

「（ま、あすなる園のみんなとも仲良くやっていけるし、勉強だって自主的にだけどしてる。気にしちやいなんだけどな）」

今日の出来事は康平にとっては珍しいことではあったが、小さな出来事であった。

しかし、その康平とは裏腹に今日の出来事でその康平に興味を持

ってしまった初春。

康平にとってはただの人助けだった今日の出来事が、二人のこれからの物語のすべての始まりであった。

春と秋（後書き）

はい、タイトルの通りです。

なお、しばらくは二人の過去編ということで二人の成長を軸に頑張
って書きたいと思います。

そのため、中学時代の初春と性格が違ふところがあります。（心の
芯の部分は変わっていないのですが、未熟なところも見せます。今
回の話でも少し見せています）

懐疑

「人助け？ 君が、魔術を使ってかい？」

「ああ」

康平が初春を助けた日の夜。

マンションの一室に、テーブルを挟むようにして座り食事をして
いる康平と冥土帰しの姿があった。

二人は普段から同じ部屋で食事を共にしているわけではない。

今二人が食事をしているのは冥土帰しの部屋であるが、その隣の
部屋も借りておりそこは康平の部屋となっている。

普段は冥土帰しの帰宅が遅いため、康平が自室で一人夕食を取る
ことの方が多い。

今日はたまたま冥土帰しの仕事が定時で終わり、彼にしか任せら
れないような重篤患者もいなかったこともあり、久しぶりに共に食
卓を囲んだ、という具合である。

「珍しいこともあるものだね？ 普段は魔術のことをおくびにも出
さず、ひっそりと過ごすことを良しとしていた君が……まあ、良い
ことだから僕は嬉しいんだけどね？」

「まるで、俺が他人を意図的に嫌ってるような言い方するなよな先
生？ 確かに、俺と関わってもし魔術のことが知れたら困るから、

あずなる園のみんなと先生以外とはほとんど口を利かないようにしてるけど」

「ふむ……そんな君が女の子を、ね。一目惚れでもしたのかい？」

冥土帰しは何気なくその一言を発したのだが、当の康平は口に含んでいた味噌汁を吹き出しそうになった。

「ぶっ！？ ごほっ！ごほっ！ な、急に何を言い出すんだよ先生……！」

「おや、そうなのかい？ 僕はあてずっぽうに言ったまでなんだけどね？」

「……………」

そうやってジッと康平の方を見つめてくる冥土帰しの視線に、康平は顔をそむける。

「べ、別に好きになっただってわけじゃないんだけど……その、なんていうのかな…… 強い子だった」

「…………？ 君はその子を助けたんだよね？ それなのに、その子は強かったのかい？」

「いや、そういう意味じゃなくって。『心が強い』ってこと」

「それは、さっき君が話していたあらすじの中の、『男にむかって女の子が反抗した』って部分を受けての発言かな？」

「うん。その子　　初春さんっていうらしいんだけど、彼女は能力自体はレベル1で、……なんて能力だったかな？　確か、『サーマルハンド』って能力名だったんだけど……」

「サーマルハンド……珍しい能力だ。触れている物体の温度を一定に保つことの出来る能力だね？」

「へえ。まあそれはいいんだけど、肝心なのは、つまり戦闘系の能力を持つてない、相手に喧嘩を吹っかけられたら勝ち目の薄い状況でもビビらずに相手に間違いを指摘できる心の強さっていうのが、あの子にはあつたんだ。もし俺があの子のように、立ち向かえるだけの力を持つてないのに絡まれてもしたら、俺ならビビッて何も言えなくなっちまう」

「ふむ……僕の専門は精神科じゃないから何とも言えないけど、要するに君はその初春という女の子に少なからず惹かれたわけだ」

「だから何でそっちに話が行くんだよ……まあ確かに、可愛い女の子だったことは認めるけどさ……」

「……青春なんだね？」

「知るかつてのー!!」

冥土帰しのからかいに康平は若干顔を赤くしながら答えると、味噌汁を乱暴に口の中に流し込み「ご、ごちそうさま！」と席を立った。

食器を食器洗い機の隣に置くと、「食器洗いは先生に任せました」と言っただけで玄関へとむかう。

「おや、もう帰るのかい？」

「今日の先生と一緒にいるとからかわれっぱなしになりそうだから。部屋に戻って勉強することにするよ」

「そうかい？ それは残念だ」

「普段は残念そうな顔なんてしないのに、こついつときだけ本当に残念そうな顔するなよ！」

最後まで冥土帰しにいじられっぱなしとなった康平は、やや乱暴に玄関のドアを閉めた。

同時刻。

学園都市のアパートの一室に、パソコンとにらめっこをしている一人の少女の姿があった。

風呂あがりなのか、しっとりとした顔をわずかに赤く染め、髪の毛も湿っているその少女は、その幼い外見からは想像もできないよ

うなスピードでキーボードをブラインドタッチしていた。

「……………」

画面をじっと見つめる少女からは吐息の音すら漏れない。

部屋に響き渡るのは、パソコンのファンから発せられる音のみである。

少女のハイスピードタッチはその後もしばらく続き、ある入力画面が表示されたところでピタツとその手が止まった。

「……………」

少女は表示された画面を、モニターに穴でも開けんとばかりにジッと見つめる。

そこには、『書庫アクセスのためにはパスワードの入力が必要です』という表示がなされていた。

バンク
書庫。

学園都市の総合データベースであり、学園都市に生活している学生のデータが保管されている。

氏名などはもちろん、各個人個人の能力まで記載されているものだが、そのようなデータベースであれば当然一般人はアクセスできない。

書庫にアクセスできるのは、学園都市を警備しているジャツジメントやアンチスキルといった、特別な立場の人間に限られている。

「……………」

少女は沈黙を保ったまま、静かな動作で花飾りの髪留めを装着すると、カップに残っていたわずかなコーヒーを飲みほした。

そして、いったん目を閉じると深呼吸をし、目を開いた。

次の瞬間、少女　　初春飾利の手がキーボードに伸び猛スピードで入力を開始した。

画面にはパスワード入力ウィンドウの他に背景が真っ黒なウィンドウも表示されていて、そこには白い文字列が尋常ならざる速さで下にスクロールしていた。

その光景はさながら、スパイ映画でコンピュータにハッキングを仕掛けているものにそっくりである。

カタカタカタッ！！

初春は一心不乱にキーを叩き続ける。

そして、白い文字列が何百スクロールしただろうか、初春はトドメとばかりエンターキーをパシッと叩いた。

すると、先ほどまで表示されていたパスワード入力ウィンドウも、白い文字列が滝のように流れていた背景の黒いウィンドウもその姿を消し、新たに一つのウィンドウが表示されていた。

「……………はあっ」

初春は、今まで体の中に溜めていた空気を一度に吐き出すかのうとく深く息を吐いた。

「これが、書庫……」

そう、初春が今まで一心不乱にキーを打ち続けて開こうとしていたもの、それこそ先ほど『書庫アクセスのためにはパスワードの入力が必要です』と表示されていた『書庫』であつた。

もちろん、初春はアンチスキルでなければジャツジメントでもない、ただの一般人である。

その初春が、なぜ発見の危険を冒してまで書庫に潜入したのか。

「……見つかったら面倒です。さっさと探しましょう。……あつた、名前検索」

初春は『住所検索』・『能力別検索』など様々なボタンがある中、『名前検索』をクリックした。

「名前しか知りませんから、これしかないんですよ。えっと……『秋葉康平』っと」

初春がその名前を入力してエンターキーを押すと、「検索中です、しばらくお待ち下さい」と表示された。

初春が知りたかつたもの、それは、自らを助けてくれた少年「秋葉康平」の情報だつた。

「（私、ホントどうしちゃったんでしょかね……こんな違法行為を冒してまで彼のことを知りたくなるなんて。悪いことだと分かっているのに、彼のことが気になって仕方ありません）」

本人は気付いていないが、初春は康平に惹かれていた。

幼い乙女心に彼の行動が強く響いた、というのもある（しつこいようだが、本人は自覚なし）が、初春が気になっているのは彼の意味深な発言だった。

「（『アンチスキルに引き渡してもいいけど後で俺が事情聴取を受けることになっちゃう。それは嫌なんだよな』……あの発言が頭を離れません。それに、『俺ならすぐ力に頼っちゃう』っていう言葉もひっかかります。まるで、能力を行使することを避けているみたいで…… 学園都市に住んでいる人間で、しかもあの程度能力が使えるのに能力を使うことを避ける理由は何なんでしょうか？）」

初春がそんなことを考えていると、画面に表示されていた「お待ちください」のウィンドウが消えて、念願の康平のデータが表示された。

「秋葉康平…… 歳は私と同一年なんですな。 ……？ 所属『あすなろ園』？ あそこは確か置き去りを保護する施設のはずですよ？ ということは、彼は置き去りで学校に通っていない？ 保護者がいないのでしょうか……でも、彼の保護者の欄には名前が書いてありますし……」

訳が分からないまま、初春は画面をスクロールさせて能力欄へと目を向けた。

そして、想像していたものとはかけ離れたものを目の当たりにする
ことになる……………

翌日、午後。

「待てー！！！」

「わー、逃げろー！！！」

あすなる園の庭で、自分より歳の小さな男の子や女の子たちと鬼ごっこに興じる康平の姿があった。

本来小学校に通っていないなければならない年齢である康平は、歳の小さな子供たちと違って午前中は勉強に時間が割り振られている。

そのため、年下の子供たちと遊べるのは午後だけなのである。

康平はこの時間がとても好きだった。

というより、康平自身も変なことだと承知しているが、彼は置き去りの施設であるあすなる園が好きだった。

もしかしたら、普通に小学校に通っている方が楽しいのかもしれない。

しかし、学園都市において学校とは能力開発の場であり、そこでは学生間での実力至上主義に則った競争が絶えず発生している。

そんな場所で育んだ友情などしょせん上っ面だけのもの、その水面下では人間の向上心による醜い争いがおきている、康平はそう考えていた。

しかし、あすなる園に保護されている子供たちは事情が違う。

あすなる園に限らず、置き去りになった子供たちの心にはもちろん競争心もあるがそれ以上に、親に見捨てられたことで生じた結束力があつた。

彼らにとって、同じ空間で暮らす他の子供たちはみな家族同然の存在となっていた。

そんな置き去りの施設独特の雰囲気、魔術という学園都市に相容れない力を持つ康平には心地よいものだった。

この空間は、魔術という得体のしれない（科学サイドから見れば）力を持ち合わせている自分をも許容してくれている、そんな風に康平には感じられたのだ。

もちろん、いつまでもここにいられるわけではない。

来年になれば康平は年齢的には小学3年に該当する。

そろそろ置き去りの施設を離れなければ、逆に周りから奇異の視線で見られる可能性がある。

「（そろそろ先生ともこれからのことを話し合わないといけねえな）」

そんなことを考えながら、康平は逃げる男の子を一人捕まえた。

「捕まえた!!」

「くっそー！ 康平兄ちゃん速すぎ!」

「だろー？ さーて、他のみんなもちゃちゃっと捕まえるとしますか」

そう言っつて康平が再び駆け出そうとしたとき、康平の視界にあすなる園の受付の人が近づいてくるのが見えた。

「康平君、ちよっといいかな?」

「受付のおばさん? どうかしたの?」

「うん。君に会いたいっていうお客さんが来てるの」

「……誰?」

康平は声を若干低くして聞き返した。

置き去りの施設を訪れる客の中には、子供たちを連れ出して、残忍という言葉ですら生ぬるい非人道的実験を子供に対して行う人間がいることを康平は冥土帰しから聞いていた。

もちろんそんな人間についていく気など毛頭ない康平は、もし自らがそのような目にあう時が来たら躊躇なく魔術で抵抗すると決めている。

受付の女性も康平の言葉尻で気付いたのか、手を横に振って康平の考えを否定した。

「ああ、大丈夫よ。変な人じゃないとは思っわ。だってあなたと同じ年くらいの女の子だもの」

「女の子？」

予想外の言葉に康平はきよとんとした。

「（俺の知り合いに、俺を訪ねてくるような女の子なんていたかな……？ いや、そもそも知り合いなんてあすなる園のみんなと先生くらいだ。もしかして、女の子をダシに油断させて連れ去るうっていう罠だったりして……）」

「なかなか可愛い女の子だったわよ？ 頭にお花の髪飾りをつけていて、とっても礼儀正しい感じだったし」

「花の髪飾り？」

花の髪飾りを身に着けた少女、そこまで聞いて康平は初めて訪ね

てきた少女に心当たりが生まれた。

「（それって、昨日俺が男の人から助けた初春さんって人じゃ……）」

「心当たり、ある人かしら？ 人違いだったり怪しい人なら帰すけど……」

「うっん、その子には昨日出会ったばかりなんだ」

「あらそうなの。もしかして、康平君に一目惚れして思わず来ちゃったとかかしら？」

「（どうして先生といい受付のおばさんといい、こんなことしか言わないんだよ！）それはないと思うけど……とにかく、俺の知り合いみたいな人だから会うよ。どこにいる？」

「私たちが普段お客さんを受付している部屋で待ってもらってるわ。私も戻るから一緒に行きましょうか」

「オッケー」

康平は受付のおばさんの後に続きながら考えをめぐらす。

「（初春さん、何しに来たんだろう…… あれ？そもそも、俺初春さんにあすなる園に通ってること教えただけ？）」

その事実気付いた康平は、やはりこれは何かの罠なのではないかと考え始める。

「（誰かが初春さんをダシに俺を誘い出してるんじゃないか…… 昨日助けた人が訪ねてきたとなれば俺が会わない訳がない、そう考えた連中のひっかけにかかったんじゃないのか？ いやでも、もしそうなら昨日の出来事を誰かが陰で見ていることになる。俺の後をつけて一人になったところを無理やり連れ去った方が効率が良い。後は、初春さんがジャッジメントかアンチスキルに通報して、その中に俺のことを狙ってる人間がいるとしたら……）」

そうこう考えているうちに、受付のおばさんと康平は部屋の前までたどり着いてしまう。

「（仕方がない。もしこれが罠だしたら魔術で切り抜ける！）」

康平はポケットの中に入っている魔術行使のために必要な紋章の書かれた紙　クレストペーパーをそっと触った。

クレストペーパーは2枚1セットになってプラスチックのケースに収まっている。

こうすることで、いちいちカードをバラバラにつかむという動作が不要になり魔術行使のスピードを速めることができる。

もちろんデメリットも存在し、ケースの中にクレストペーパーを入れるということはペーパーの交換が手間となり、何種類もの魔術を使おうとするときには不便である。

しかし、それがあまりデメリットにならない理由が康平にはある。

第一に、魔術の発動機会が少なく、仮に発動するにしても大抵は目立たない肉体強化系の魔術に終始するからである。

第二に、そもそも康平はまだ紋章術師としては修行中の身であり、4種類すべての属性を扱うことができないからだ。

康平が現在扱えるのは紋章術の4つの属性の中でも最も基本的な、炎と水の紋章を使った魔術だけである。

「（ま、これだけでも逃げる程度なら大丈夫だろ。さすがに能力者とガチなバトルをすることになったら、4つ全部扱えないと無理だろうけど）」

これが畏だったとき、相手方に能力者がいないことを祈りながら康平は部屋の中へと入った。

部屋の中には来客用のソファが置いてあり、そこに初春はちょこんと腰かけていた。

「じゃあ、私は隣にある受付カウンターに戻るから、何かあったら声かけてね」

受付のおばさんはそう言うと、部屋から出て行った。

部屋には康平と初春だけになる。

「（……とりあえず、座るか）」

康平は辺りに注意を払いながら初春の正面に腰かけた。

「……えっと、初春さん、で良いんだよね？」

「あ、はい。そうです。覚えててくれたんですね」

「そりゃあ、1日じゃ忘れないよ。それで、わざわざ訪ねてきたってことは俺に何か？」

康平は表面上は笑顔で初春と話しているが、周囲への警戒は怠らない。

「はい。まずは、昨日の件で康平さんにお礼を申し上げようと思って……ほら、昨日康平さん買い物があるって言って走ってっちゃったじゃないですか」

「ああ、そんなこと？ 別にお礼だなんてそんな、当然のことをしただけだと思ってるけど」

「私がお礼しないと気が済まなかったっていうのもあるんです。これで今日の第一のミッションは終わりました」

「……第一のミッション？ 第二のミッションもあるの？」

「ええ。これも康平さんに関係することなんですけど……不思議に思いませんか？ どうして私が康平さんの通っている場所が分かっていたかってこと」

「っ!？」

その初春の言葉に、康平はポケットに突っこんでいた手をケースに触れさせる。

初春の視線も先ほどと違って鋭く、康平の内心を見透かさんとす

るかのようであった。

「……そういえばそうだね。俺は初春さんに、俺があすなる園に通っていることは教えてない。どうして知っているの？」

「あなたのことが気になったので少し調べたんです」

「調べた？ そんな、俺の個人データなんて書庫くらいにしか載っていないはずだ。どうやって俺の情報を手に入れた？」

「だから、その唯一あなたの情報が載っている場所からですよ」

「書庫から……だと？ いや、書庫の情報なんて子供には到底見られるようなものじゃないはずだ」

「そうですね。でも確かに、私はあなたの情報を手に入れました。これが証拠です」

そう言つと、テーブルの上に置いてあったバッグから何かを取り出そうとする初春。

康平は何か武器のようなものが出てくるのでは、と身構えたが、初春が取り出したのは1枚の紙だった。

「これに、康平さんの名前や通っている学校名、それに能力が記載されています」

そう言って差し出された紙を、康平はふんだくるようにつかむと目を通す。

そこには初春の言うとおり、康平の名前や通っているあすなる園の文字、そして、能力の欄が色ペンで丸く囲ってあった。

「っ……」

「そう、そこが最大の謎でした。康平さん、あなたが昨日私を助けてくれたとき男の人の攻撃を片手で受け止めた。私と同い年くらいの男の子が、素の状態でそんな芸当ができるわけがない。てっきり、あなたが肉体強化系の能力者だと思いました。でもその紙には……」

そこまで言うと初春はいったん言葉を切る。

康平は凝視していた紙から顔を上げると、初春をジッと見つめる。

「その紙の能力を記す欄には、何も書かれていない。つまり、あなたは能力者ではないということになります。……これは一体、どういうことですか？」

To be continued .

無力

「その紙の能力を記す欄には、何も書かれていない。つまり、あなたは能力者ではないということになります。……これは一体、どういうことですか？」

「……………」

初春の厳しい視線の前に、康平は何も言葉を発せられずにいた。

「……………どうする？」

どうにかこの場を切り抜きたい康平は、初春に悟られないように周囲の様子を注意深く観察する。

「（どうやら、黒服着た怪しげな連中が隠れてるっていうありがちな展開じゃないみたいだ。じゃあ、初春さんは一人で来たってことか？）」

こうしているあいだにあすなる園の他のみんなが人質に取られているということも康平は考えたが、外からは鬼ごっこをしているらしき声が聞こえてくるのでその可能性は低い。

「（第一、俺を誘い出すのが目的ならわざわざ書庫のデータなんて持ち出さなくても、『昨日のお礼がしたいので外に出ませんか』って初春さんに言わせるだけで十分だ。だとすると、この書庫のデータは初春さんが自分で手に入れたってことか……………？）」

そこまでは整理をつけた康平だったが、しかし、他にも納得のい

かないことばかりで康平の思考はまとまらない。

「……初春さん、いくつか聞きたいことがあるんだけど」

「はい、何でしょう?」

初春は依然厳しい視線を康平に向けたままだ。

「どうやって書庫に入り込んだ? あそこは、ジャツジメントかア
ンチスキルくらいしか見ることができないってせんs……知り合い
から聞いてるんだけど」

康平は冥土帰しのことを先生と呼んでいるのだが、危つく先生と
呼んでしまうところであった。

「(下手に先生って言ってしつこく聞かれるのも面倒だ……言い直
せて良かった)」

「……いきなり痛いところをついてきますね」

「えっ?」

「まあもう見せちゃったものは取り消せませんし、ばらしても大差
ないでしょう。そうです。私が書庫にハッキングを仕掛けました」

「ちょ、ちょっと待って初春さん。ハッキングって簡単に言うけど、
俺と初春さんって歳近いよね?」

「はい、っていつか同い年です」

「そうだったんだ……じゃなくて、俺たちの歳でハッキングってどういうこと?」

「どう、と言われましても……私は機械、とりわけパソコンの操作には自信があるんです」

「自信ってレベルじゃねーぞ……警備会社からお誘いがくるぞ」

「将来はそういう道も十分視野に入れてますから、むしろお誘いが来てくれた方が嬉しいんですけどね」

「……まあ、俺たちの年頃にしてはビックリな特技を持ってるってことにしとく。次の質問なんだけど、こんなもまで俺に見せて、何が目的なの?」

「当然、書庫のデータにも載っていないあなたの能力についてです。なぜ、書庫に記載がないのですか?」

「質問を変えるよ。それを知ってどうするつもりなの? 記載不備で俺を申請するつもり?」

「そんなことはしません。ただ……」

「……ただ?」

康平がその先を促すと、今まで厳しい視線をむけていた初春の顔がすこし下を向いた。

「私を助けてくれた人のことを、少し知りたくなっただけです。自分でもよく分からないんですけど、その……興味が湧いたんです」

「……………」

その初春の言葉に康平はわずかに沈黙するが、首を横に振って初春の希望をかき消そうとする。

「女の子に興味を持ってもらえるのは嬉しいことだけど……………俺の力については知らない方がよいよ」

「どうして、ですか？」

「どうしても、だよ。初春さんなら分かってくれるはずだ、『世の中には知らない方が幸せなこともある』ってやつ」

「そこまで言われたら余計に気になります」

「説明しても理解してもらえないだろうし、理解してほしくない。

……………これは、パンドラの箱なんだ」

「パンドラの、箱……………」

「そうだ。悪いことは言わない、初春さん、俺の力については触れない方がよい。知ったところで初春さんにメリットなんて一つもない。むしろデメリットばかりだ」

「でも……………」

なおも初春が食い下がろうとしたその時、外がにわかに騒がしくなった。

「……？ 难道不是吗？」

初春は外の騒ぎに首をかしげるが、康平は険しい顔つきになると部屋を飛び出した。

「あつ！？ ちょっと！？」

初春も康平の後を追って慌てて部屋を出た。

「（くそっ、やっぱり何かの罠だったのか！？）」

康平は騒ぎのする方へと全力で走る。

そして、右に曲がれば教室や庭のある方へ、左に曲がればあすなろ園の出口にむかう廊下の曲がり角へとやってきた。

「（声のするのは……右か！）」

いったん角の手前で立ち止まり、そっと両側の廊下を覗いて怪しい人物がいまいかどうか確認する。

どちらにも誰もいないことを確認した康平が右に曲がるうとしたとき、後ろからパタパタとスリッパの音が聞こえてきた。

「ちょ、ちょっと、待ってくださいよー！」

敵かと思つた康平がポケットからクレストペーパーの入つたケースを取り出しながら振り返ると、近づいてきていたのが初春であることに気付いた。

「な、なんだ、初春さんか……怪しい人かと思つたよ」

「スリッパでパタパタ追いかける人なんていませんよ……それより、何ですかそれ？」

「え？」

康平が初春の視線をたどると、そこには康平が取り出したばかりのケースがあつた。

透明なプラスチックでできたケースは、当然中に入っている紋章の書かれた紙をしつかりと透かしていた。

「っ！？ い、いやあ、これは、その……」

康平は返答の言葉を考えながら慌ててポケットにケースをしまう。

「？ 何か模様のようなものが書かれていましたけど……」

「えーっと……そう！ 今のはいったん心を落ち着かせるためのもので……見てると心が落ち着くんだよ！おなじないみたいなものかな！」

「落ち着く……？ 十分焦ってるように見えますけど」

「（初春さんのせいだよ！）そ、そう？ ま、まあそれは良いとし

て、初春さんはどうしてついてきたの？」

「え？ どうしてって……いきなり康平さんが飛び出して行ったからに決まってるじゃないですか」

「そ、そりゃそうか……じゃなくて、初春さんはお客さんなんだから、こつという時は部屋で待ってるのが普通なんじゃない？」

「でも、この騒ぎが気になりますし……」

「もしこれが喧嘩とかだったりしたら、下手したら初春さんも巻き込まれちゃうでしょ？ さっきの部屋で待っててよ、できるだけ早くに戻ってくるからさ」

「いえ、私も行きます。私にもお手伝いできることがあるかもしれません」

「いや、そうは言っても初春さんはお客様……」

そこまで言って康平は言葉を切らざるを得なかった。

なぜなら、初春の視線がキツと険しいものになっていて、とても康平の説得を聞き入れる状態になかったからである。

「私も、お手伝いします」

「（っ……初春さん、ホント正義感が強いんだな……こりゃ止めてもダメか）……分かった。でも、できるだけ俺の後ろにいるんだよ？」

初春の説得を諦めた康平は、改めて左右の廊下を確認する。

と、先ほどは先を急いでいたせいか気付かなかったが、左の廊下の先、出口のさらにむこうにある門のところに1台の黒い車が止まっていることに気付いた。

「（誰か偉い人でも来てるのか？あすなる園には似合っていない車だなあ……ん？）」

そこで康平は、黒い車に人が乗っていることに気付いた。

「（誰か乗ってる……って、子供じゃないか！？）」

高級そうな黒塗りの車に乗っていたのは、二人の女の子であった。

「（車の持ち主の子供かな……ん？手を挙げた……っ！？）」

車の中に乗っていた子供が両手を挙げたのを見た康平は、右に曲がろうとしていた角を左に曲がり、黒い高級車に向かって走り出した。

「あれ！？ そっちは声のする方とは反対方向ですよ！？」

初春の制止の言葉に康平が大声で答えた。

「あの黒い車の中に子供がいたんだよ！」

「？ 車の持ち主の子供さんなんじゃないですか？」

「俺も最初はそう思った！ だけど、子供の両手についてたんだよ

「手錠が！」

「手錠！？」

康平は車に近づくと、周囲に人影がないことを確認して車の窓を叩いた。

「おい、大丈夫か！？」

中には、同じ年くらいだろうか、少女が二人乗っていた。

「康平さん、二人の手錠はそれぞれ運転席と助手席につながれていて、上下に動かすことはできるみたいですけどドアのところまでは動かせないみたいです！」

「これじゃあ、中から窓やドアを開けてもらうのは無理か！」

ドアの取っ手を下に動かして外から開けようと試みる康平だが、当然のごとく鍵がかかっていた。

「しょうがない、こうなったら窓を割って入るしかない！」

「子供の力じゃ無理ですよ！ それに、こういう車の窓って強化防弾ガラスでできていて、大人がいても割れるかどうか……」

「じゃあピッキングでもするってののか！？ 生憎、こういう高級車ってというのは電子キーじゃなくて超精巧なアナログキーで出来ててピッキングも無理だ！ それより、ガラスが散るかもしれないから後ろ向いてる……！」

康平に言われて慌てて初春が後ろを向いたのを確認すると、康平は素早くポケットからケースを取り出す。

「炎と炎の紋章が生み出すは、すべてを焼き払う紅蓮の火炎。その灼熱の炎にて、我が障害を排除せよ！」

そう小声で呟いた康平は、紋章の入ったケースを振りかざした。

すると、ケースから球形の炎が突如出現し、まっすぐに車の助手席のガラスに当たった。

直後、熱の影響で助手席横の窓ガラスが粉微塵に砕け散る音が響き渡った。

「ひゅっ!？」

その大きな音に驚嘆の声を上げる初春。

康平は、窓ガラスが砕けたことで出来た穴に手を突っ込むと内側からドアの鍵を解除してドアを開けた。

「おい、大丈夫か!？」

助手席のドアから車内に入り込んだ康平は、後部座席に座っていた二人の少女に声をかけた。

どちらも歳は康平や初春と同じくらいで、一人はニットのワンピースを着ただけで下にはスボンもスカートも穿いていないという女の子にあるまじき奇抜な格好をし、もう一人はイルカのビニール人形を隣に座らせていた。

「…………あなた、超誰ですか？」

どちらの少女も康平のことを怪訝そうな顔つきで見つめていたが、ワンピースの少女が先に口を開いた。

「え？ あ、ああ、俺は秋葉康平って名前なんだけど……………」

「アンタの名前なんて聞いてないんだよ。こっちが聞いてんのは、その康平くんが私らに何の用かってこと」

威圧的な口調で康平の言葉を遮ったのは、イルカの人形を隣に座らせた少女だ。

「な、何って、そりゃあ二人を助けて……………」

「助けに、ねえ……………そういうヒーローごっこは施設のお友達とやってくれない？」

「なっ……………」

予想だにしていなかった人形の少女の言葉に康平が啞然としてみると、ワンピースの少女が「それより……………」と言った。

「運転手の野郎、戻ってくるのが超遅いですね。何をチンタラやってるんでしょうか」

「さっさと私らを研究所とやらに連れてってくんないかねえ？」

「ちょ、ちょっと待て！ 研究所だと!？」

人形の少女の発した単語に、康平はこの二人がなぜ手錠をされて車に乗っているのかおおよその見当がついた。

「まさか二人は、これからどこかの研究所で何かの実験を受けるのか!？」

康平の言葉に、ワンピースの少女が「おや？」と反応した。

「研究所、という言葉だけでその慌てぶり……あなた、ひよっとして学園都市の裏事情に詳しいとか？」

「い、いや……」

「まあ良いでしょう。それより、あなたのお友達が超大変なことになってますが」

「は?」

ワンピースの少女が康平の後ろを指さしながらそのようなことを言うので康平が振り返ってみると、いつの間に戻ってきたのか、黒い車の運転手らしきこれまた黒服を着た男が初春に拳銃を突きつけながら立っていた。

「っ!?!? いつの間に!?!?」

「それはこちらのセリフだ。ガキ一人連れ出すのに苦労してやっと戻ってこれたと思ったらこのザマだ。おい小僧、それはお前の仕業か?」

男が窓ガラスの割れた助手席を顎で指すと、康平は「へっ」と笑った。

「だったら、何だっというんだよ？」

康平は男を挑発しながら改めて周囲の状況を確認する。

男の右手には拳銃が握られ、その銃口は初春の頭部にしっかりと向けられていた。

「（あれじゃあ、どんな素人でも外しようがない。それより、コイツのセリフだともう一人子供がいるみたいだけど……）」

康平は男の後ろに女の子が一人、隠れるように立っていることに気付いた。

「（あれ、さっきまで俺と一緒に鬼ごっこやってた海奈じゃねえか！？）」

男に連れられてあすなる園から出てきたのは、康平の2歳年下の女の子、なっかわかいな夏川海奈であった。

海奈は怯えた様子で男と康平を交互に見ていた。

「威勢のいい小僧だ。だが、お前ごときでこの状況をどうにかできるとでも思っているのか？」

男は馬鹿にしたようにそう言い放つと、銃口を初春から海奈に向けなおした。

銃口がガチリ、と海奈の頭に触れた瞬間、海奈の口から「ひっ」と弱々しく悲鳴がもれた。

「テメエ、海奈をどうするつもりだ!!」

康平の叫びに男は何も答えず、空いている左手で海奈の手をつかむと車に向かって歩き出した。

そして、康平の魔術によって窓ガラスが粉碎された助手席のドアを開けるとそこに海奈を押し込みドアを閉めた。

「海奈もその二人と同じように研究所ってやつに連れて行くつもりか!! そんなことさせるかよ!!」

そう息巻いた康平は車に近づこうとするが、それを制する声があった。

「超待ちなさい」

「っ!?!」

それは、黒塗りの車の後部座席に座っているワンピースの少女だった。

「あなた、私たちを助けようなんて超考えちゃいませんよね?」

「当たり前だろ!! 研究所に連れてかれたら、何されるか分からないんだぞ!?!」

「はぁ………やっぱりですか。さっき私の隣の彼女も言いましたけど、

そういうヒーローごっこは施設の中でやって下さい」

「なっ！？ じゃあ、どうなっても良いって言うのかよ！？」

「そんなこと、置き去りだと言われた時から超自覚済みです。私たちからすれば、あなたの行動の方が迷惑なんですよ」

「っ、二人はそうかもしれないねえ！！ けどな、海奈は怯えてんだよ！！ 怯えてるやつも無理やり連れてくつてのかわ！？」

「あら、いいじゃない別に」

そう言ったのは、イルカのビニール人形を隣に座らせている少女だった。

「こんな施設にいるより、研究所の方が学園都市に貢献してるって意味じゃ何万倍も勝ってるし」

「失敗したら即死ぬ、しかもその死ぬ確率の方が高い研究施設に知り合いを送り出せっていうのか！？」

「チツ、テメエもゴチャゴチャとうるせえな。こっちは施設で生ぬるく生きるくらいなら研究所に行って一発デカイことしてみてえんだよ。その海奈ってのも、もしかしたら研究員もビックリするような力を手に入れちゃうかもよ？」

「……これ以上は超時間の無駄でしょう。運転手さん、出しちゃって下さい」

ワンピースの少女がそう言うと、運転手の男は「実験材料のガキ

に命令されるなんてな。胸糞わりい」と言いながらも、邪魔立てする康平の存在の方が嫌だったのか車を発進させる。

「ま、待て!!」

猛スピードで発進する車を康平は慌てて追いかけるが、あっという間にその距離が開く。

「た、助けて!! 助けて康平兄ちゃん!!」

割れた助手席の窓から海奈が小さな体を必死に突き出して康平に向かって叫ぶ。

「海奈!! 海奈!!!」

しかし、どんなに声を張り上げたところで車が止まるはずもなく、その姿はどんどん小さくなる。

「くそっ!! こうなったら魔術で……!!」

康平は先ほどガラスを割るときに使ったケースを再び振りかざそうとするが、魔力を込める前にその動きを止めた。

「（今ここで車に向かって魔術を使ったら、車ごと3人を……!!）」

その逡巡のあいだに、康平と車とのあいだには絶望的な距離の開きが生まれていた。

「康平兄ちゃん!!!」

「海奈……海奈！！ 海奈！！！」

そして、海奈と二人の少女を乗せた車は交差点を曲がってその姿を消した。

「かい、な……」

康平の足から力が抜け、その場にひざまずく。

目頭は熱くなり、視界に入っていた紋章のケースが歪む。

「（魔術があっても、海奈を助けることはできなかった……くそっ
！！）」

「海奈……！！！」

車が過ぎ去り静けさを取り戻しつつあった路上に、康平の悲痛な叫びが響き渡った

無力（後書き）

まだ序盤だったのに重い展開……

ワンピースの少女とイルカの人形の少女とは、もちろんあの二人のことです。（とつくにご存じだとは思いますが）

決意（前書き）

あまりにも投稿が無さすぎると、こっちの小説は打ち止めかと皆さんに思われてしまつかもしれない、と言っわけで、生存報告ってところでは。

しかし、連載小説にあるまじき字数の少なさになりました。（約2500字です。……少ない！！）

決意

第13学区。

幼稚園や小学校が多いこの学区では、必然的に子供を見かける回数も多くなる。

そこでは子供の笑顔、困惑顔、怒り、悲しみ……様々な感情を見ることが出来る。

しかし、いかに多種多様な表情を見ることが出来るとはいえ、路上にガラスの破片が散らばりそこに少年がうずくまって、その少年のことを花飾りをした少女が沈痛な表情で見つめているという光景は異様である。

「海奈……!」

『児童養護施設 あすなる園』と書かれた建物の門の前でうずくまっている少年 秋葉康平は、謎の男によって連れ去られた少女の名前を呟き続けていた。

「康平さん……」

花飾りをした少女 初春飾利も、康平に声こそかけてはいるものの、目の前で人が連れて行かれるという初めて見る光景に頭の処理が追いつかないでいた。

「「……」」

二人の間には沈黙しかない。

普段はそれ自体が学区の象徴である子供たちの声も、この二人の近くでは異物以外の何物でもない。

「……っ、こんなことしてる場合じゃないです！ アンチスキルに通報しないと！」

先に声を上げたのは初春だった。

初春はポケットから携帯を取り出すと、アンチスキルを呼び出すための3ケタの数字を入力して通話ボタンを押そう……とした。

しかし、初春がまさに通話ボタンを押そうとしたとき、康平の口からポソッとつぶやきが漏れた。

「？ 康平さん、何か言いましたか？」

「……無駄だ」

「無駄？ 何がですか？」

「海奈のことをアンチスキルに通報するんだろ？ それが無駄だつて言ってるんだよ」

「……康平さん、海奈さんが誘拐されたショックが大きいってことは分かります。でも、いきなりそこまで思考を飛躍させるのは早すぎ……」

「そうじゃない」

そう言った康平の顔には絶望がハッキリと表れていた。

「あれはただの誘拐じゃない。海奈は何かの実験の被験者となるために連れていたれたんだ」

「だったら、余計に通報しないといけないじゃないですか！」

「初春さん。君は、ここが学園都市だつてことを忘れてる」

「……どういことですか？」

「俺も直接触れたことはないから詳しいことは分からないけど、学園都市には『裏の世界』つてのがある。そこでは、主として置き去りの子供たちを使って非人道的な実験つてのが行われてるんだ。海奈が連れて行かれたのも、そういうった類の施設だと思う」

「……………」

「そして、俺の知り合いの話じゃ、そういう実験は仮に通報しても上に揉み消されてしまうことだつてあるらしい」

「でも、『らしい』つてことは絶対じゃないですよ。だったら、通報してみないと分からない……………」

「どうして、乗せられていた2人に手錠がつけられていたと思う？」

「？ それは、あの2人が逃げないようにじゃないんですか？」

「付け加えると、あれはただの手錠じゃない。能力者の能力使用を

抑制する機構が備わっていた。小学生までの子供なんて大抵は能力レベル3までが限界。そんな子供に、わざわざ単価の高い手錠を使う意味、なんだと思う？」

「……絶対に、逃がしたくない？」

「そつだ。万が一にも逃げられたくない、そんな意図が見え見えだった。ま、あの2人には逃げる気持ちなんて少しも無かったみたいだけど。それはともかく、あの男は2人を絶対に施設に連れて行くつもりだった。恐らく、それなりに重要度のある実験なんだろうな。だとすると、止めようとしても上から圧力のかかる可能性が高いのさ」

「そんな……」

「それが学園都市さ。海奈にも実験の被験者になる素質があったと思っただけがむしろ良いのかもな。後は、せめて無事に戻ってきてくれることを祈るくらいしか……」

「そんな簡単に諦めて良いんですか!？」

周囲の静寂に響き渡った初春の叫びに、康平は初春を見つめた。

「康平さんにとって、海奈さんはそんな簡単に諦められるような存在だったんですか!？」

「そつは言っただけ。でもな……」

「でももへちまありません!! 海奈さんの存在がちっぽけじゃないって言うのなら、助けるが当然です!!」

「初春さん、世の中は正義感だけでどうにかなるほど甘くない。海奈が連れて行かれたのは俺も悲しいし、あの場で止められなかったのは悔しい。でもな！ 学園都市ってのは底無しなんだ！ 下手に足を突っ込むとこっちが沈みかねない！」

「康平さんはその底なし沼に片足も突っ込んだことがないんでしょー！？」
「だったら何を恐れる必要があるんですか！！！」

「突っ込んでからじゃ遅いから言ってるんだ！」

「……そうですか、分かりました」

「……俺も本当に悔しい。でも、流石に相手が悪すぎた……」

「康平さんがそういう態度ならもう知りません。私が一人で勝手に通報します」

「全然分かってねえ！！！」

康平の言葉を見無視し、初春はポケットから携帯を取り出す。

「分かってないのは康平さんの方です。さっきまでは必死に海奈さんを助けようとしていたのに、相手が一人から集団そしきに変わっただけでこの体たらくじゃ話になりません」

その初春の言葉に、康平はカチンと来て声を張り上げそうになるが何とか踏みとどまった。

「（クソッ！この分からず屋！ でも、初春さんの言ってることも

間違っではない…… ああもう！！ どうすりゃ良いんだよ！！」

「車の番号は記憶済みですから、それをアンチスキルに伝えれば……」

「……何だつて？」

「え？」

「今、何て言った？」

「車の番号は記憶済み……」

それを聞いた康平の頭に、一つの結論が出た。

「（何だ、簡単なことじゃないか……）初春さん、君のスキルなら、走行中の車をナンバーを使ってリアルタイムに追跡するってこと、出来るよな？」

「え？ええ。人工衛星からナンバーで検索をかけてヒットすれば、後は宇宙から追尾できますけど……」

「今、出来るか？」

「パソコンは毎日持ち歩いてますからできますけど…… まさか……！」

康平の言わんとしていることに気付いた初春の表情が驚きへと変わった。

「（アンチスキルは頼りにできない。上に押さえつけられるだけじゃなく、通報した初春さんも目撃者ってことで危険な立場に置かれるかもしれない。かと言って諦めたくもない。なら、手段は一つ…！！）そうさ。俺が直接海奈を助けに行く！！」

決意（後書き）

というわけで、次回、海奈救出編です。

実は、まだ海奈のキャラが決まっていなくて……

キャラの個性や性格を決めるのって、その後のストーリーに地味に影響するので時間がかかってちゃうんですよね……

流石に次話投稿までには決めますが、恐らくまた3週間ほどかかりますので、気長にお待ちください。

侵入

『第一学区方面、列車が発車します。閉まるドアにご注意下さい』

「ギリセーフ！！ 何とか間に合ったぜ！！」

学園都市モノレールのホームへと駆け上がった康平は、そう叫びながら発車寸前のモノレールに飛び乗った。

直後、列車のドアとホームドアが閉まりモノレールは動き出した。

康平は息を整えながら、ポケットから携帯電話を取り出すと電話帳を開き、『初春飾利』を選択して電話をかけた。

車内は『優先席付近では電源を切り、それ以外でも通話は自重』というのが社会通念であるが、今の康平の頭にはそんな通念など入る余地すらない。

「もしもし初春さん！？ 聞こえてる！？」

『感度良好です！』

「今第一学区行きの列車に乗った！ 海奈を乗せた車の現在位置は掴めた！？」

『もう少し待って下さい。今ナンバーを使って自動車をリアルタイムに追跡する、アンチスキルのシステムにアクセスしているところです』

『次は、第十一学区、第十一学区です。お出口は左側です』

「初春さん、もう次の停車駅が近づいてきてる。出来るだけ早めに頼む。降り過ぎして、『実は今通り過ぎた学区に研究所がありました』じゃ痛すぎる」

『落ち着いて下さい康平さん。次の停車駅である十一学区は、学園都市と外とを結ぶいわば陸路最大の玄関口です。そんな外との交流が頻繁な学区に、学園都市の技術が集まっているとも言える研究所はほとんどありません。少なくとも、十一学区は素通りです』

「そ、そうか。じゃあ怪しいのは……」

康平はドアの上の部分に取り付けられている、途中の停車駅を示したプレートに視線を向ける。

『個人的な予想ですが、怪しいのは十一学区の次、第一〇学区です』

「第一〇学区……？ あそこって何が特徴的な学区だっけ？」

『あそこには学園都市で唯一墓地があります。それが最大の特徴ですが、他にも第一〇学区には様々な研究施設や原子力関係の施設があります』

「研究施設……でもさ初春さん、そんなあからさまなところに裏の研究施設なんて作るか？ 真っ先に存在を疑われる場所だけ？」

『木の葉を隠すなら森の中、というのはどうでしょう？ 数多くの研究施設が集まる第一〇学区の中に裏の施設を作っても、外から見ればすべて等しくただの研究施設に見えます。こうすれば、施設の

存在をアンチスキルに察知されても施設の選定に時間がかかり、その間にアンチスキルから逃げおおせる可能性が高くなりますし」

「な、なるほどな…… それにしても、よくそんな冷静にいられるね初春さん」

初春の冷静な分析に、康平は舌を巻かざるを得なかった。

『ごういうとき重要なのは、必ず助けるという気持ちと冷静さを持ち合わせるのだと思っています。気持ちだけ先走ってしまつては、いざという時に大きな判断ミスを犯してしまいますから』

『第十一学区、第十一学区。お出口は左側です』

気付けば列車はいつの間にか駅に到着しており、自動放送のアナウンスと共にモノレールとホームドアが開き乗客の乗り降りが始まった。

「初春さん、第十一学区だ。降りなくて大丈夫？」

『あと3秒……出ました！ 予想通り、車は第十一学区を通り越し第十学区に向かっています！』

「分かった！ 俺は次の第十学区で降りるから、初春さんナビお願い！……」

『任せて下さい！ 康平さんの携帯の位置情報もパソコンに入力済みです。しっかり道案内します！』

『第一学区方面行き、列車が発車します。閉まるドアにご注意下さ

い』

再びモノレールのドアが閉まり、列車が動き出した。

『次は、第十学区、第十学区です。お出口は左側です』

「（今のうちに準備は整えておくか。研究施設の中は警備員や警備ロボがうろついているかもしれない。海奈を連れて気付かれずに脱出は……無理だと想定しておいた方が良さだろうな）」

康平はポケットからクレストペーパーの入っているケースを取り出すと、中から2枚のペーパーを引き抜いた。

2枚の紙にはどちらも赤い紋章が描かれている。

現段階の康平が扱える炎と水の属性のうちの一つ、炎である。

「（炎と炎の組み合わせで使える魔術は、炎を繰り出すのと肉体強化……俺の今のレベルじゃ、肉体強化しても銃撃に対してノーマージというわけにはいかない。銃を装備してる警備ロボに出くわしたら対抗できない。炎もイマイチだ。学園都市には発火能力者が比較的多くいるって話だし、それからしても恐らく警備ロボには熱源探知装置が標準で装備されているはず。炎が届く前に探知されてアラート警報を鳴らされてしまう。そうなったら、その1体を倒した次の瞬間には警備ロボに囲まれてるかもしれない。となると……）」

『あの、康平さん』

「ん、動きでもあった？」

『いえ、康平さん、今も携帯を耳に当てて通話してます?』

「ああ。それがどうかした?」

『もう、やっぱり忘れてる。康平さんがあすなる園を出ていく前に渡しましたよね? ハンドレスで通話するためのイヤホン』

「あ、そういえば……」

康平は再びポケットに手を入れ、青の紋章の描かれた紙と一緒にイヤホンとイヤホンに音声を転送する小さな端末を取り出す。

『端末を携帯に取り付けければ、耳にはめたイヤホンに音声が転送されます。イヤホンには指向性のマイクも内蔵されていますので、イヤホンを付けたまま話すだけでOKです。携帯はポケットにでもしまっておいて下さい』

「りょーかい」

康平はイヤホンを耳にはめ、端末を携帯に差し込むとズボンのポケットにしまい、取り出した紙を見つめる。

「（炎がダメなら水か。水と水の組み合わせなら水流攻撃ができる。警備ロボを故障させることが出来れば……防水加工がしてあっても水の浸入を100%防ぐなんてことはそうそうできないはず。水球を作り出してロボを包むように展開すればいけるか……?）」

『第十学区、第十学区です。お出口は左側です。お降りの際は、お忘れ物の無い様にご注意下さい』

そうこうしているうちに列車は第十学区の駅へと到着しており、康平は水の紋章の紙を2枚ケースの中にしまつと立ち上がった。

「第十学区だ。初春さん、準備は良い？」

『はい。対象は完全に補足済みです。逃しはしません！』

列車のドアが開き、ほんのわずかに遅れてホームドアが開く。

「待つてる海奈、すぐ助けに行く！」

学園都市モノレール第十学区駅から走って15分くらいかかったであろうか。

初春からの情報をもとに康平がたどり着いたのは、世間ではそこそこ名の通った製薬会社の工場であった。

康平は入り口のゲートから少し離れたところに立ち、様子を窺いながら初春に話しかけた。

「……ねえ、初春さん」

『はい、何でしょう?』

「本当にここであってるの?」

『はい。車はこの敷地の奥にあります』

「いや、でも、ここって薬屋とかでよく見かける名前の製薬会社の建物だよな? ……まさか、有名な会社がバックについてるとか?」

『それは分かりません。そうかもしれないですし、関連会社という名目で敷地を借りているだけかもしれません。実際、車が止まっているのは工場ではなく少し離れたところにある別館の近くですし』

「なるほど。確かに、自分たちの敷地を持つよりその方が搜索の手が伸びるのが遅そうだし、何かと便利なのかもな」

『それより、中に入る方法ですが……』

「ん? ばれない様にコソコソ侵入するんじゃないの?」

『ばれない様にコソコソって……具体的にはどうするつもりだったんですか?』

「そうだなあ……ゲートを通る車のかげに隠れながら、とか、あるいは工場の周りを囲ってる柵をよじ登るかぶつ壊すかして……」

『はあ…… それ、本気で言ってるんですか?』

「当たり前だろ! 海奈を助けるためなら何だってする! 今更不法侵入の一つや二つ……」

『そういう意味じゃないです！ そんな簡単に入れると思ってるんですかってことです！』

「え？ 無理なの？」

『無理ですよ常識的に考えて……まずゲートですが、製薬会社だけあって警備は厳重です。車の中も外も、人が一人でも隠れられそうな場所はくまなくチェックされます。センサーも設置されているので、警備員だけ無力化出来ても意味がありません。それ以前に、恐らく警備ロボも配備されているでしょうし、警備員の無力化だけでも一苦勞でしょう』

「じゃあ柵から……」

『電流が流されていると思いますが？ 出力ですが、恐らく人間が気絶する程度は出ていると思います。上部には学園都市製の麻痺薬が塗布された有刺鉄線で越えることも難しいです。さらに言えば、電流が何らかの理由で遮断された場合自動的に通報されるようになっていないはずですよ。すぐに警備ロボが駆けつけてきます』

「マジかよ……じゃあどうすんだ？ まさか、穴でも掘ってもぐって行くって言うんじゃない？」

『大丈夫ですよ、そんな非現実的な手段はとりません。確かめたところ、柵に使われている通報システムは、流れている電流の一部分が遮断されたときにだけ作動するようですよ。恐らく、停電や故障で柵全体に流れる電流が止まった時にも作動するのを防ぐためでしょう。停電や故障でいちいち作動しては、いざ侵入されそうになった時に『また故障か』という心理が発生して対応が遅れてしまうこと

を考慮したのでしょうか』

「？ でも、高圧電流が流されているとしたら、侵入者の立場としては電流全体を止めようと思うよな？ それだと意味のない警備システムになりそうだけど？」

『そうそう簡単に電流を止められない様になってるんです。電源装置の周辺にはAEMジャマーという、能力者の能力使用を妨害する装置が設置されているらしいです。大量に電力を消費するのが欠点らしいですが、電源装置の近くに設置することでその問題は解決されているようです。』

「つまり、能力者が能力で電源装置を壊すことは無理ってことか。物理的に破壊することは？」

『恐らく無理でしょう。電源装置をおおっている金属の箱ですが、素材はチタンを基盤とした合金で強度・耐食性はかなり強いです。なにしろ潜水艦に使われるような代物です。金属パイプで殴ったら壊れるようなことは無いでしょうね』

「八方ふさがりじゃねえか……」

不安の色を隠せない康平はそうつぶやいたが、返ってきた初春の言葉には不安は少しも含まれていなかった。

『いえ、大丈夫です。ハードで攻められないのなら、ソフトで攻めればいいんですよ』

「……ソフトで、攻める？」

『ええ、簡単な話です。こちらから、システムに侵入して柵に流れている電流をすべて止めます。同時に、監視室のモニターには電流が流れ続けているという偽の情報を表示するようにプログラムをいじります。これなら通報されることなく電流を止め、さらにそれを感知されることもありません。ただ、施設の周囲を巡回している警備ロボだけはどうしようもありません。いかんせん初めて侵入したプログラムなのと私の経験不足で、そちらにまで手が回せないんです。警備ロボが離れたすきについて何とか上手く突破して下さい』

「いや、そこまでしてくれるだけでかなりありがたいよ初春さん。警備ロボはこっちで何とかする。配置されている数は？」

『柵の1辺につき1台、計4台です』

「侵入するためなら止めるのは1台で十分だな……じゃあ初春さん、電流を止めたら教えて……」

『もう止めましたけど？』

「……………えっ？」

『だから、もう止めました。モニターのデータもすでに改竄プログラムを組み込んであります』

「仕事早いよ初春さん……　じ、じゃあ、俺はこれから施設に侵入するから、何か変わったことがあったら教えて」

『はい。……………ところで康平さん、肝心なことを聞いていませんでしたが、柵自体はどうするんですか？　上部には麻痺薬付きの有刺鉄線があつて、皮膚にかすっただけでも動きに支障が出ると思われま

す。壊すにも、素手でどうにかなるような代物じゃないですし……」

「ああ、それに関しては大丈夫。こっちで何とかするからさ。じゃあ初春さん、何か動きがあったら連絡よろしく。俺からも困ったことがあったら連絡入れるから」

『え？ ちょっと……』

康平はイヤホンについている切のボタンを押すと、ゲートの方へむかって歩き出した。

ゲートから侵入するわけではないが、警備員や警備ロボの武装を確認するためだ。

「（拳銃に警棒、無線か……まあ、普通だな。見つからないように進むのは当たり前だけど、相手の戦力を探るのは当然だぜ）」

ジロジロ見ると怪しまれるので通行人のふりをしながら様子を確認した康平は、ゲートをスルーして柵に沿って歩いた。

しばらく進んで、ちょうどゲートが見えなくなってきたころ、今度は巡回の警備ロボが康平の視界に入ってきた。

「（来たな……でも、通り過ぎるまでは手を出さないようにして）」

警備ロボのAIを誤魔化すため、康平は携帯をいじりながら歩き、さも一般の通行人であるかのように装う。

そして、警備ロボが横を通り過ぎるのを確認すると即座にポケッ

トに手を突っ込みケースに触れた。

「（今だ！！）水と水の紋章が生み出すは無垢な清水。水よ、私の障害をすべて排除し道を切り開け！」

唱えるやいなや、警備ボロを水の球体が包み込んだ。

警戒モードならいざ知らず、通常の巡回モードでいきなり攻撃を受けたロボの防水機構では上下左右から侵入を試みる水に勝つことはできなかった。

水球で包むこと十数秒、康平が魔術を解除すると警備ロボはピクリとも動かなくなりゴトツと横に倒れた。

「よし、出だしは順調。次は柵か。これも水で……」

サツと周囲を見渡した康平は今度はポケットからケースを取り出すと、ケースを柵の方へと突き出した。

すると、ケースから細く絞った水が勢いよく飛び出した。

水が当たった部分の金属が切断された。

「（炎で思いつきり加熱するって手もあったんだけどな。そのためには長時間加熱する必要があったからな。ウォーターカッター作戦だぜ）」

人が一人通れる程度の大きさの楕円状に切れ目を入れると、康平は切れた部分を蹴って倒し中へと入る。

「（さーで、ここからが本番だ。慎重かつ大胆に、冷静かつ素早く行く！！）」

監視カメラは初春がいじって来てある。

康平は人影に注意しながら奥へと進んでいった。

侵入（後書き）

さて、そろそろ本格的な康平の魔術バトルが書けそうですね。

え、何故かって？

そりゃあ、「学園都市で無事に済む」なんてことはまず無いからです。

原石（前書き）

この「とある少女と紋章術師」では、「とある双子の第二人生」とは違った風に色々なことを書いていきたいと思えます。

今話のサブタイもその一つです。（不安しかありませんが）

原石

「うーむ……」

「どうです先生、何か分かりましたか？」

窓の無い、蛍光灯の光だけが部屋のすべてを照らす一室。

二人の男が一つの装置の前に立ち、その装置に接続されているモニターを見つめていた。

装置には幼稚園児くらいの歳の女の子が眠った状態で入っていて、頭には半球状の機械が取り付けられていた。

「データを採取した直後だから何とも言えんな。これからじっくり解析をせねば。ただ一つだけ言えるのは、能力開発を受けて能力を得た人間とはどこか違う点があるということだ」

「そうですか…… 何でしたっけ？この娘のように、能力開発を受けていないのにもかかわらず能力を使える人間の名称」

「『原石』だ」

「あ、そうでしたそうでした。でも、どの辺が研究に値するんですか？ 偶然、開発を受けていないのに能力を使えるってだけなんじゃないですかね？ そりゃあ確かに、開発を受けずに能力を使えること自体がすごいといえばすごいことですけど……」

「そうだな…… 例えとしては、これが分かりやすいかな？」

先生と呼ばれた白衣の男は、モニターが載っている机の引き出しから小さく光る2つの物体を取り出した。

光ると言っても自ら光を放っている訳ではなく、蛍光灯の光を反射させているだけはあるが。

「それは……ダイヤモンドですか？」

「そうだ。だが、この2つのダイヤモンドには決定的に違う点が存在する」

白衣の男は2つのダイヤのうちの1つをつまんで、相手の黒服の男に見せる。

「これは普通のダイヤ」

持ち上げたダイヤを手のひらに戻し、もう片方のダイヤを持ち上げる白衣の男。

「これは人工的に作られたダイヤだ」

「人工ダイヤモンド……ですか」

「ダイヤモンドを人工的に作ることは不可能なことではない。事実、学園都市の技術を用いずとも外の技術で十分人工ダイヤモンドを作ることができる。まあ、もっとも装飾用の人工ダイヤモンドを見かけることはあまりないだろうが」

「それで、ダイヤモンドと原石にはどういった関係が？」

「ダイヤモンドと同じく、能力者も人工のものと天然のものがあるということさ。ただし、ダイヤモンドと決定的に違うのは、先ほども言ったがダイヤモンドは天然物の方が見かけるとは多い。しかし能力者は、学園都市で人工的に作られたものの方が多いということだ」

「つまり、原石たちは希少価値が高い？」

「それだけではない。学園都市で能力開発を受けると、例えば炎が操れたり水を操れたりとその能力に説明が付きやすい。しかし……」

白衣の男はダイヤモンドをポケットにしまうと、装置で眠っている少女の方に向き直る。

「原石たちの能力は説明がつかないことが多い。学園都市にはこの娘以外にも原石……と思われる能力者がいるが、それらのすべてが理論付けて説明できているわけではない。今『と思われる』と言ったが、現段階ではそもそも原石なのか、はたまた既存の能力の派生形なのかすら判断しづらいものもある」

「それでは、この海奈という娘も原石ではない可能性があるのでは？」

「いや、彼女は真正銘本物の原石であることが確認できる数少ない例だ」

「その根拠は？」

「我々の観測によると、この娘は自らの意志で能力を使えない。学

園都市で能力開発を受けた者は意識してから能力を発動させるまでの過程を、開発を受けた時点で脳内にいわばインプットされる。レポートなどは精神的に不安定になると能力が使えなくなるが、インプットされた過程そのものを忘れてしまう訳ではない。ところがこの娘は、そもそも能力使用までの過程を知らないのだ」

「？ では、この娘はどのようにして能力を使うのですか？」

「今のところ彼女が能力を扱っているのが確認されたのは睡眠中だけだ。つまり、無意識に能力を振るっているのだ。そのほとんどがレム睡眠時であったことから察するに、怖い夢でも見ている時に使ってしまうのだろうか」

「睡眠中……能力の中身は？」

「部屋の物を浮かしたりして動かす、周囲の住宅を突如停電させる、屋外に設置されている照明が割れる……様々だ。どのような能力の使い方をすればそんなことが出来るのか……それを知るのが目標だ」

「はあ……私にはとてもついていけなさそうです。っと、それより……」

今までの会話を難しそうな顔をして聞いていた黒服の男は表情を厳しくすると、白衣の男の耳元に顔を近付ける。

「今回の計画、本当に大丈夫なんですよ？ 何でも、現在上層部から……」

「案ずるな。この娘は置き去り、勝手に連れて行ったからといって騒ぎ立てるような輩はいない。騒ぎ立てる者がいなければこのこと

がバレることもまたない」

「そう……ですよね」

黒服の男はそう言ったが、その脳裏には海奈を連れ去るときにそれを阻止しようとした少年の姿が浮かび上がっていた。

「（なぜあの小僧のことが思い浮かぶ……？ まさか、俺はあの小僧がこの娘を助けに来ると思っっているのか……？ 馬鹿な、ガキ一人に何ができる？）」

それでも、なぜか男の頭からその少年のことが消えることはなかった。

康平は、海奈を連れ去っていった車が止められている別館までやってきた。

監視カメラの映像は初春が誤魔化しているので、たどり着くのにそう時間はかからなかった。

しかし、康平には気がかりなことがあった。

「ねえ、初春さん」

康平は耳に装着しているイヤホンのスイッチを切から入にすると、初春との通話を再開させた。

『あ、康平さん！？ どうしてさっきは私の質問を無視して切っちゃったんですかぁー！？』

「悪い悪い。少しでも早く中に入りたかったからさ。それより初春さん、俺が別館まで行き着いたのは確認できてる？」

『え、はい。もちろんです』

「じゃあ俺がここに来るまでの道のりに、警備ロボがいなかったことも？」

そう、康平がいともたやすく別館までたどり着けたのにはもう一つ、敷地内の警備ロボ不在という理由があったのである。

『はい。ですが、なぜ警備ロボが配置されていなかったのかは記録が無いので分かりません』

「普段から配置されてないの？」

『いえ、ちゃんとシフトが組まれているのでそれはありえません。』

……………あつ』

「何か見つけた？」

『関係あるかどうかは分かりませんが、警備ロボに関して、新しいロボの発注がその製薬会社名義で行われています』

「新しい警備ロボの発注？ 故障でもしたのかな？」

『発注されたのが1台ではないので、故障というよりアップデート目的の交換ではないでしょうか？ そこに警備ロボがいなかったのは、まだ新しいものが届いていないからでしょうかね』

「つまり、俺は良いタイミングで入り込んだってことだな。じゃあ初春さん、この建物の入り口を開けてくれる？」

『はい。少し待ってください』

康平の耳に、初春がキーボードを叩く音が聞こえてくる。

ロックを解除してくれているのだろう、康平はそう思いながら戦略を練り直す。

「（ロボがないのなら水の紋章で行く必要はないな……）」

警戒対象がないのなら、わざわざ水を使った派手な攻撃をする必要はない。

2枚の炎の紋章で発動する肉体強化を施し、警備員の背後から一発かませばそれで事は足りる。

康平はポケットからクレストの入っているケースを取り出すと、

2枚セットになっていた水のクレストを抜き取り代わりに炎のクレストを差し込む。

そして目を閉じて、自らに肉体強化の術を施す。

ちゃんと術が発動できているか確認するために地面の石を拾って投げしてみると、石は小学2年生の歳の子供が投げたとは思えないくらいに飛距離まで飛んで行った。

「（よし、今日も順調だぜ！）」

炎のクレストを使った魔術は、紋章術の中でも最初に扱ういわゆる初級レベルのものであり康平には慣れたものである。

康平がポケットにケースをしまうのと同時に、目の前の扉から「ピー」という電子音が鳴った。

『少々手こずってしまいました……』

「この短時間で『手こずった』とか、もう俺には理解できないよ初春さん…… それにしても、ホント初春さんの技術はすごいな。こりや将来初春さんを好きになる男の人は絶対浮気なんて出来ないな。あらゆる角度から監視されるも同然だし」

『ええ、絶対にさせません』

「だろっね……」

『ところで康平さん、一ついいですか？』

「ん？」

『海奈ちゃんですけど、能力者なんですか？』

「え？ いや、使ってるところは見たことないけど……どうして？」

『いえ、海奈ちゃんに素質があるとしたら、珍しい能力に目覚める素質なのか、持っている能力が飛躍的に進化する素質なのか、何なのかなあって思いました』

「さあな。でも、海奈は連れて行かれることを嫌がってた。だってら助けるだけさ」

『……そうですね。ごめんなさい、こんな時に質問なんてしてしまつて。先に進んで下さい』

康平がドアを開けると、すぐさま通路が二手に分かれていた。

「いきなりかよ……初春さん、どっちだか分かる？」

『どこに海奈ちゃんが監禁されているかなら、建物の全部屋の監視カメラを確認すればすぐに分かりますよ。えーつとですね……あ、いましたいました！そこを右に曲がって少し進んだところにある部屋ですね！ ただ……』

「……ただ？ つて、うわっ!？」

角に隠れて様子を窺いながら初春と通話していた康平を、突如揺れが襲った。

「な、なんだ！？ 地震！？」

『え？ 地震ですか？』

「う、うん。急に建物全体がガタガタって揺れた」

『おかしいですねえ…… 外と違って学園都市では地震の予報も出されていますが、今日地震が起きるなんて発表は無かったんですけれど……』

学園都市には、樹形図ツリーダイアグラムの設計者を用いた地震予報というものが出されていて、天気予報と同じく外れることは滅多にない。

「それは俺も知ってるよ。でも、現に地震起こってるぞ！？」

『……………』

「……………初春さん？」

『いえ、確認してみましたが出っぱり地震は起こっていません。初期微動検知に使われるP波が検出されていませんので…… もしかして、能力者？』

「能力者って、まさか、この地震は能力者が引き起こしたものってこと？」

『そこ……分りません。その施…が実験場だと言つのなら、何らかの……』

「？」

康平はイヤホンを耳に押し当てた。

通話に突然ノイズが走るようになり、初春との会話が聞き取りにくくなったからだ。

「もしもし初春さん？ ノイズのせいでよく聞こえない。もう1回言って！」

『え…………ごめ…………も…………』

ノイズはあっという間にひどくなり、もはや通話不能な状態にまでなってしまった。

「うわ………… どうすつか……………」

康平はノイズだけになってしまったイヤホンをいったん耳から離すと、ふーっと息を吐いた。

「（ここを右に行けば海奈にはすぐに会える…………らしい。でも、警備がついてないなんてことは考えられない）」

初春との通話が復帰するまで待てば、施設内の警備状態などを知ることができ対策をいくらでもたてること出来る。

しかし、イヤホンからはわずかな初春の声も聞こえなくなっており、まるで妨害電波の中に立っているかのようである。

通話がすぐに回復するとはとても思えない状況だ。

なにより康平を躊躇わせているのは、先ほどの初春の「そこを右に曲がって少し進んだところにある部屋ですね！ ただ……」の「ただ……」の部分であった。

「（ただ……なんだろう。警備が厳しいとでも言っていたのかな？ それともまたロック？ ロックなら、もしかしたら初春さんが勝手に解除してくれているかもしれないけど）」

しかし、すべては憶測に過ぎない。

「（頼れるのは、自分の魔術だけってことか……）」

康平はポケットからケースを取り出すと、右手の汗を服でぬぐうてからしっかりとケースを手にした。

「（いいぜ……ロックがかかってるなら解除するまで、警備がいるなら叩くまでだ！！）」

康平は駆け出した。

「（目指すは正面に見える扉！ 片っ端から行く！！）」

隠密行動なんてなんのその、足音を潜めることも一切せず康平は突っ走る。

そして、勢いそのままに部屋の中に駆け込もうとしたその時……

「ぎゃあああああああ！！！！」

「うおっ！！！！？」

駆け込もうとしていた部屋から、男が文字通り吹き飛ばされながら康平の方へと向かってきた。

ドアが吹き飛んだ時の音と衝撃で転んだ康平は何とか男にぶつかることはなかった。

康平が振り返ると、飛ばされた男は外傷こそ無いものの地面でひびいていた。

「（死ななかつたのが不思議なくらいだろこれは……ってそれどころじゃねえ！ 一体何が……）」

正面に向き直った康平は、この一連の現象の原因を見るべく目を凝らす。

康平が入ろうとしていた部屋、その奥に人影が見えた。

「（あの身長……子供？ って、まさか！？）」

その子供の人影は康平に気付いたのか、走って康平の方へやってきた。

「康平お兄ちゃん！！」

そう、その人影こそ

「海奈!!」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
d
.

原石（後書き）

原石って今後原作ではどう絡んでくるんでしょうかね……？

今更ですが、この小説ではしばらくのあいだレールガンの4人女子（当然ながら初春除く）は登場しない予定です。

その代わりに、意外なキャラが登場するかも……？

<ふふ。この小説なら。私の出番もあるかもしれない。

海奈は渡さない

「康平お兄ちゃん!!」

「海奈!!」

ドアの吹き飛ばされたから走って出てきたのは、まさに康平が探し求めていた人物　夏川海奈であった。

海奈は勢いそのままに康平に抱きついた。

「海奈!　お前、無事か!?　どこか怪我とかしてないか!??」

「うん!!　康平お兄ちゃんこそ、海奈を助けに来てくれたの!??」

「当たり前だ!　お前、あすなる園から車で連れて行かれる時俺の名前を呼んでただろ?　お前はこんなところ来たくなかつたんだろ?」

「……………」

「海奈?」

突如黙りこくってしまった海奈。

康平の身体に、海奈の手の震えが伝わってきていた。

「……………康平お兄ちゃん。あのね、私……………おかしくなっちゃったみたいなの」

「おかしくって……やっぱり、何かされたのか？」

「分からない。でもね、さっきの爆発も、そこの倒れてる人を飛ばしちゃったのも海奈なの……」

「なっ!？」

康平は改めて周囲を見渡した。

金属製のドアは吹き飛ばされてかつ変形しており、破片で辺りの壁は傷だらけになっていた。

「これを、海奈が……?」

「どうしよう康平お兄ちゃん…… 私、自分が怖いよ……」

「何も怖がる必要はない」

「っ!？」

廊下に響き渡った第三者の声に、康平はとっさに海奈の身体を後ろに隠して声のする方を睨みつける。

「誰だっ!？」

「それはこちらのセリフではないかね少年。君こそ、どうしてこの研究所にいるのだ？」

「そんなことはどうだっていい! それより、てめえら海奈に何を

した!!」

「やれやれ、どうやら私の質問にはお答え願えないらしい。まあよい、ここまで忍び込んだ褒美として特別に教えてやるう。その少女の秘密を」

「秘密、だと？」

康平は睨むのをやめずに聞き返す。

「そうだ。どうやら君は、私たちがその少女に何かした結果彼女がおかしくなったと思っっているようだが、それは見当はずれの推測だ。我々が彼女に何かをしたのではない。彼女自身の力が覚醒しただけのことだ」

「海奈の、力だと？ 海奈は、能力者だったのか？」

「そうだ。とは言っても、街中を歩きまわっている人工品ではない。その少女はこの学園都市で能力開発を受けずに能力を扱える、天然物の能力者なのだ」

「能力開発を受けてないのに能力を使える……だと？」

康平はその存在に心当たりがあった。

心当たりなんて他人事という言葉ではなく、それは康平自らのことであつた。

「（俺も学園都市では能力開発を受けちゃいないが、その代わり魔術が使える。ひょっとして、海奈も魔術の使い手だっというのか？

そして、学園都市では魔術師は天然物の能力者に映る……？）」

しかし康平は、そんな自らの推測を即座に否定する。

「いや、もし海奈の力が魔術をもにしたものなら、同じ魔術師である俺が気付かないはずはない。この施設に入ってから魔術の気配は少しも感じてない。だから、少なくとも海奈が魔術師じゃないのは間違いない」

「我々は、少女のような天然物の能力者のことを『原石』と呼んでいる」

「……そこまでは分かった。じゃあ、さっきの爆発は海奈が逃げ出すために起こしたものでってことか？」

「と、思うだろうか？　しかしそうではないのだ」

「え？　違うのか？」

「100%違うとは言い切れないが、少なくとも自らの意志によって引き起こされた爆発ではない。先ほどの爆発は、別の部屋に少女を移そうとしたときに恐怖に駆られた彼女が『無意識』に発動させたものだ」

「無意識って言葉を使って責任逃れするつもりだろうが、それは卑怯すぎるぜおっさん！！」

「クツクツクツ。確かに他者から見れば我々が責任逃れをしているようにしか聞こえないだろう。しかし本当のことなのだ。なんなら本人に聞いてみるといい」

「海奈、どうなんだ？」

康平は海奈の顔を覗き込むようにして尋ねるが、海奈は康平の服をギュツと握りしめたまま何も言わない。

「海奈？」

康平が再度呼びかけると、海奈はようやく顔を上げた。

その目は真っ赤になっており、涙で溢れていた。

「ぜ、全部、そのおじさんの言うとおりだよ康平お兄ちゃん」

「そ、そんな馬鹿な……」

「ヒック……う、ううん、本当。そこで倒れてる人に『君のことをもっと詳しく調べるから、別の部屋に行こう』って言われて腕を掴まれたの。その人の言葉はとっても優しくかったけど、それでも海奈は『怖い』って思ったの。そしたら急に頭の中が真っ白になって……」

「すばらしい……今まで寝ている時だけだった能力の発動が、ついに目覚めている時でも起きたということか。まだ自覚して使用できる訳ではなさそうだが、それも時間の問題だな。そうなれば、我々の研究はまた一歩進む」

「ふざけるな！！ 海奈は渡さない！！」

康平は叫ぶが、男はそれを無視して海奈に語りかけるような口調

で話しかける。

「どうだいお嬢ちゃん、我々に協力してくれないか？ 我々なら君の不可思議な力の謎を解明できる。そうなれば、もう力に怯える必要も無くなるのだ」

「……本当？」

海奈が聞くと、男は笑顔を顔に貼り付けて頷く。

「ああ、本当だ」

「嘘をつくな！！ そんなこと言って海奈をボロボロになるまで引きずり回して、あらかたデータが集まったら捨てるか殺すんだろ！！」

「殺す？ ハハハ、そんなことはしないよ。君は知らないだろうが、原石はこの地球上に100人も確認されていない希少な存在だ。その貴重さは学園都市で100万以上いる人工の能力者とは比べ物にならない。そんな貴重な人材を我々が殺すわけないだろう？」

「正論に見える言葉で騙されるか！！ お前らが欲しいのはその原石つてのそのものじゃなくて、原石の『データ』だろうが！！ データさえ取れば原石も人工も関係ない、ただのゴミみたいに扱うのは目に見えてる！！」

康平のその叫びに、男はやれやれといった風に首を横に振った。

「やれやれ、どうやらこのお客人は頭が相当かたい人種らしい。悪いが我々も時間が惜しい。少女をおいて帰るつもりが無いのなら、

「この場でおねんねして頂く他ない」

白衣の男はそう言うのと右手を上挙げた。

すると白衣の男の後ろから黒服に身を包んだ屈強な男たちが4、5人現れ、白衣の男をかばうように立ちながら拳銃を取り出して康平にむけた。

「っ!?!」

「彼ら是对能力者用の装備も持っているし、対能力者用の訓練も受けている。多少能力の攻撃を受けたからと言ってひれ伏す様なことはない。君がどうやってここに侵入したのかは知らないが、その年頃で彼らを問題なく倒せるのは第一位か第二位くらいだろう。そして君はそのどちらでもない。もう逃げ場は無いぞ」

「へえ。じゃあ、俺にはどんな選択肢があるって言うんだよ?」

「あくまで我々と対峙するか、その少女は諦めてこの場から去るか
の2択だ。少女を置いていくと言うのなら命は助けてやっても良いぞ?」

「ほざけ。命だけは助けるとか言って、それは俺をこの場から逃がすってことじゃなくて、俺を捕まえて実験の材料にするってことだ。文字通り命は助かるかもしれないけど、それなら死んだ方がマシだったって後で後悔するに決まってる」

康平はあくまで海奈を離そうとせず、黒服の男たちを睨む。

「なるほど。つまり、あくまでその少女を渡すつもりはない、とい

うことだな？　ならば、君には口封じのためにも死んでもらうしかない」

「良いぜ？　ただし、今この状況で銃を撃つたら弾は俺を貫通して海奈にも当たるってこと分かってるよな？」

康平は相手を牽制するが、この程度の牽制では彼らは怯まないし康平は感じていた。

「（この程度の脅しに手も足も出無い様じゃ、こいつ等案外ザコくね？って思えるんだけど……そんなことはないだろうな。さあ、どうやってくる……？）」

康平は正面の黒服たちの一挙手一投足を見逃すまいと意識を集中するが、男たちに動きは無い。

「（動かない……こっちが動くのを待ってるのか？）」

事態は膠着するかと思われた。

しかし、状況は海奈のつんざくような叫び声で一気に動きを見せた。

「康平お兄ちゃん、後ろー！！」

「っ！？　しまったー！！」

正面の男たちに気を取られて背後への警戒が薄くなっていた二人に気付かれないように別の男が接近していて、男は海奈を後ろから抱きかかえるように引っ張ると康平から引き離し、すぐさま銃を康

平にむけた。

「死ね小僧!!」

「(間にあわない!!)」

一瞬のこと、康平には回避行動などとれるはずもなかった。

男の引き金にかかっている指に力が入る。

康平は目をつむり死を覚悟した。

しかし、いつこうに銃声が響き渡る様子が無い。

「(……? なんだ?)」

恐る恐る康平が目を開くと、海奈を抱きかかえていた男が拳銃を落とし、仰向けに倒れているところであった。

状況の整理がつかない康平であったが、身体は勝手に動いた。

康平はポケットからクレストケースを取り出すと先ほどまで正面に立っていた黒服の男たちの方へとむけた。

すると、クレストから炎が噴き出し男たちを襲う。

「能力者だったか!? 防御用の装備を用意する、いったん下がれ!!」

康平はクレストを男たちの方へ向け攻撃を続けながら、気絶している男の海奈を掴んでいる手をほどいた。

「海奈、大丈夫か!？」

康平が話しかけるが、海奈は放心状態だった。

「ま、また、海奈が……?」

「（海奈のやつ、自分の能力に動揺してるのか!？）とにかく、逃げるぞ海奈!！」

康平は海奈の手をつかむと、海奈を引っ張り強引に走り出した。

通路をしばらく走り、来た道に戻るように左に曲がり出口を目指した。

しかし……

「なっ、閉まってる!？」

初春によって開錠されているはずのドアが開かなくなっていた。

「（侵入したことがバレて、ロックをかけ直されたか!？ なら、力づくで!！」）

康平はいったんドアからはなれると、助走をつけてドアにぶつかる。

肉体強化が施してあるため普通なら壊せないドアでも壊せる、康平はそう踏んでいたのだが……

「いってー！ー！！ びくともしないじゃねーか！ー！」

康平はドアを思いっきり引つ張るが、それでもドアが開くことはなかった。

「（よく考えたら、能力者に侵入されたり攻撃された時のことを考えてドアをありえないくらい強固に作つてゐることは当たり前か……でも、どうする！？）」

康平たちが今いる場所はいわば袋小路、逃げ場は無い。

唯一採りうる手段は引き返すことだが、追つ手に追われているこの状況では袋小路に留まることとほとんど変わりが無い。

「（どうする！？ 引き返して別の出口を探すのが最善の策だろうけど、連中と鉢合わせになる…… 恐らく今度は装備を整えてくるだろうし、海奈を連れて逃げ回れるとは思えない。初春さんの通話が復活さえすれば……）」

しかし耳にはめてあるイヤホンから聞こえてくるのは相変わらずノイズだけで、初春のあの甘ったるい声は欠片も聞こえてこない。

「万事休すなのかよ……！！！」

康平がそう悔しそうに漏らすと、尻餅をついていた海奈がフラフラと立ち上がった。

「海奈、本当に大丈夫なのか？」

康平は頭の中で策を練り続けながら海奈を支える。

「う、うん、海奈は大丈夫だよ康平お兄ちゃん。それより、今の海奈たちって『八宝菜』ってやつ……？」

「八宝菜？ はっぼうさい……ひょっとして海奈が言いたいののは『八方ふさがり』じゃないか？」

「そうそう、それだよ」

「どんな間違いだよ…… まあ、八方ふさがり、だろうな。けど、まだ試合終了じゃない。ここまで来たら、最後まで戦ってみせる」

「康平お兄ちゃん、それって死亡フラグってやつがたってるんじゃないの？」

「……だろうな。でもな海奈、俺は海奈を助けるためにここまで来たんだ。たとえどんなに勝ち目が無くても、俺は海奈の前に立ち続けなきゃいけないんだ」

「康平お兄ちゃん……」

康平が静かにそう言うと海奈はジッと康平の顔を見上げていたが、キツと表情を険しくするとふらつきながらも康平の前に立った。

「海奈！？ 俺の後ろに隠れてる……！」

「今度はね、海奈が康平お兄ちゃんを助ける番だよ」

「何を言ってるんだ海奈！！ そんなフラフラした状態で、しかも海奈は自分で能力を発動も制御もできないんだろ！？」

「ううん。多分、今度は大丈夫だと思う」

「どうしてそう言い切れる！？」

「さっき、海奈が康平お兄ちゃんを撃とうとしていた人を倒したでしょ？ あの時海奈、『康平お兄ちゃんを助けなきゃ！！』って思ったの。そしたら、身体の奥が熱くなって男の人が倒れたんだよ」

「うん？ つまり、俺を助けたいと思ったから能力が使えた、海奈はそう言いたいのか？」

「うん。康平お兄ちゃんは殺されちゃうかもしれないのに、それでも海奈を助けに来てくれた。だから、今度は海奈が康平お兄ちゃんを助ける番」

「いたぞー！！」

装備を整えた黒服の男たちがバラバラと駆けつけてきた。

海奈は両手を広げて、康平をかばう様に男たちの前に立ち塞がった。

しかし、康平と海奈では身長差があるため、どんなに海奈が康平を庇おうとしても首から上の部分は飛び出してしまふ。

男たちがそれを見逃すはずがなく、海奈が立ち塞がっていても銃

の構えを解くことはない。

「お嬢ちゃん。その坊主を助けようとする心構えは立派だが、その小さな身体じゃ無理があるってもんだぜ？ 坊主を殺されたくなくなったら大人しくこっちにきな」

「やだ！！ 海奈は康平お兄ちゃんと一緒にあすなる園に帰る！！
そのために、海奈が康平お兄ちゃんを守る！！」

「そうか…… でもなお嬢ちゃん、残念ながらそれは儚い夢に終わ
りそうだぜ？ いくらお嬢ちゃんが坊主をかばっても、俺たちはプ
ロだ。お嬢ちゃんに当てることなくその坊主の頭を撃ち抜くことも
出来る。坊主の血で真っ赤になりたくなくなったらそこを離れるんだ
な」

「……………」

男たちの言葉にも海奈は動かない。

「それがお嬢ちゃんの答えなんだな？ じゃあ、こちらも容赦しな
い……」

その言葉と同時に、男たちの銃から一斉に弾丸が発射された

海奈は渡さない(後書き)

ホント、原石って謎ですよね……………その分好きに書けるんで書き手からすれば困らないのですが。

もし原石の能力にも理屈や法則がある、なんて設定が今後出てきたらどうしよう……………w

さて、どう見ても(？)次回で脱出する様相を呈していますが、そんなにりとは……………ね。

伏線とは言えないような超微妙な伏線が超未回収ですしね。

次回、超展開が康平たちを超襲います。

魔術師 VS 能力者

「海奈は康平お兄ちゃんと一緒にあすなる園に帰る！！そのために、海奈が康平お兄ちゃんを守る！！」

「それがお嬢ちゃんの答えなんだな？　じゃあ、こちらも容赦しない！！」

男の声と同時に、銃声が施設に響き渡った。

弾丸は身長差のある海奈の壁など存在しないかのように、真っ直ぐに康平へ向かって飛ぶ。

康平は目をつむっていて、その光景を見ることはない。

仮に目を開いていたにしても、銃弾が発射されてから康平に届くまで1秒以下。

弾丸を視覚で認識することなど出来ないであろうが。

「（銃声が聞こえてからもう何秒も経つ……とっくに俺は死んでるんだろうな。これが死後の世界ってやつなのか。死ぬときってあっさりしてるんだな）」

脳を撃ち抜かれたのだから当然か、などと康平は考えながら目の

前に三途の川が見えるのをジッと待つ。

「（父さんはまだ世界中を逃げ延びてるからいいかな……？ きつと母さんは迎えに来てくれるんだらうな……）」

もつじき見えるであろうその光景を思い浮かべる康平。

しかし、いつまで経っても康平の視界は暗黒のままだった。

「（……？ まだ母さんは見えてない。やっぱり、三途の川なんてものは無くて、死後つてのは一人寂しく無限に広がる暗黒の世界を放浪するしかないのか……）」

期待していた母親の姿はおろか、川すら見えてこない現状に康平は落胆し、これからどうしたものかととりあえず座り込む。

床のかたく冷たい感触が康平に伝わってきた。

……………床？

康平は気付いた、ひょっとして自分はまだ死んではいないので？

そして自分が目を閉じているだけだということに気付いた康平はパッと目を開いた。

突然視界に入ってきた光に康平は思わず目を細めるが、それでも

目の前の状況に目をこらす。

銃を撃った構えのまま、男たちがまるで幽霊でも見たかのような表情をしていた。

そして男たちの視線を追って康平も見た。

両手を広げている海奈のちょうど頭上で、まるでそこだけ時が止まってしまっているかのように弾丸がピタリと止まっているのを。

「……は？」

康平にも目の前の光景が信じられなかった。

そして、海奈が両手を広げるのを止めて手を下ろすと、空中浮遊していた弾丸もパラパラと床に落下したのである。

「な、なんだ、これは……？」

状況からしてこの奇跡を起こしたのは海奈しかない。

それは脳で分かっているながらも、その現実を認めることはすぐにはできなかった。

しかし、海奈の奇跡はそれだけにとどまらない。

海奈が下ろした手を自らの正面に突き出した。

「ぐあぁっ!？」

すると、まるで質量のある物体に追突されたかのごとく男たちが後方へ吹き飛ばされたのだ。

黒服の男たちは勢いそのままに背中から壁に激突し床に崩れ落ちた。

気絶か、あるいは脳震盪を起こしているのか男たちに立ち上がる気配はいっこうに無い。

康平はただただその光景に見入っていた。

康平が現実引き戻されたのは、自らの足元でばたつと人が倒れる音がしたときだった。

「っ、海奈!？」

康平は屈んで海奈をゆするが、こちらも気絶しているらしく反応がない。

「海奈!？ しっかりしろ!！」

回復魔法を施そうと、康平がポケットから水の紋章が描かれたクレストが2枚セットになっているケースを取り出そうとしたその時、今までノイズを垂れ流し続けていたイヤホンから人の声が聞こえてきた。

『……っ、いきなり通信が回復!? 康平さん、聞こえますか!？』

聞こえてきたのはやはり初春の声であった。

この状況で聞こえてきた初春の声は、康平にとってまるで天使の声であった。

「初春さん！？ 良かった、ナイスタイミング！！」

「康平さん、状況は！？ 海奈ちゃんは！？」

「落ち着いて初春さん、海奈は無事助けた！！ もっとも今は気絶してるみたいだけど……」

「怪我などは無いですか？」

「ああ」

康平はそう答えながら、取り出したケースを左手に持ち右手を海奈の額に当てた。

康平が念じると彼の右手が淡く輝き、光が海奈の身体を包み込んだ。

「（これでよし。今の海奈に効果があるか分からないけど、かけとかないよりはマシだろ）」

「お二人とも無事でなによりです」

「ああ。でも喜ぶのはまだ早いよ初春さん。喜ぶのはあすなる園に俺たちが帰ってからだ」

「そ、そうですね」

「初春さん、そっちでもすでに確認済みだと思うけど、俺が入ってきた扉のロックがかけ直されてる。もう1回解除してもらえる？」

『あ、はい！ ごめんなさい、ロックされているのは分かっていたんですが、通話以外にもデータ通信にも影響が出てて操作不能になっっていたんです』

「電話の不通に通信の不安定化……」

康平はその原因も、海奈の能力ではないかと思った。

「（確証は無いけど……海奈が気絶して倒れた直後に通話が復活したのがなによりの証拠かな？）」

そんなことを考えながら康平が海奈の顔を見つめっていると、ピーッと電子音がして扉がわずかに開いた。

『康平さん、ロックを解除しました』

「ああ、ありがとう初春さん。じゃあそこで待ってて、今から海奈を連れてそこに戻るよ」

康平はそう言つと通話を切り、海奈を背負つて扉を開けた。

いくら康平が男の子とはいえ年齢は小学2年生相当、本来なら海奈を背負うことは難しいのだが、肉体強化を施してある康平には簡単な作業であった。

「っ、まぶしっ」

蛍光灯から発せられる人工の光とは比べ物にならない強さで世界を照らす太陽に、康平は思わず下をむく。

そして同時に感じる、やっと薄暗い世界から海奈を連れ出すことに成功したのだと。

「どんなに科学が進んでも、人間にはやっぱり外の空気が1番だな。室内のこもった空気とは比べ物にならないぜ。さ、海奈、うちに帰るっ」

気絶している海奈に語りかけるように康平がそう言うと、振動を与えぬようゆっくりと歩き出した。

しかし、学園都市の闇は、まだ康平たちを光の元へ帰ることを許しはしなかった。

康平は、建物の角の部分から影が伸びていることに気付いてしまった。

「(っ!!) 誰か角に隠れてる!？」

康平は音をたてないように海奈をそつと外壁のところ座らせると、両手にクレストの入ったケースを持つ。

片方のケースには炎のクレストが2枚セットで入っていて、もう

片方のケースには水のクレストが2枚セットになって入っている。

炎と水の紋章しか扱えない康平にとっては、最大限の攻撃態勢である。

「（影からして人数は一人。奇襲するために人数を減らした……？ いや、こっちは子供二人だけ、奇襲なんてセコイ真似しなくても頭数揃えれば簡単に抑え込める。ならなぜ一人？ ……まさか、一人で何人分にも相当する力の持ち主。つまり、そこにいるのは能力者か！？）」

康平に緊張が走る。

康平に能力者との戦闘経験が無いというのもそうだが、目の前で炎を出された敵から見れば康平は何らか（十中八九発火系）の能力者に映ったと考えるのが自然である。

『能力者』である自分に対したった一人とは、仮に装備が整っていても手薄すぎるのでは、康平はそう考えた。

そしてそこから、隠れているのは能力者、しかも高位能力者ではないかと検討を付けたのである。

「（ここから脱出するにはどうしてもヤツの視界に入らなきゃいけない……やるしかない！！）」

康平は覚悟を決めると、陰に隠れている人物にむかって話しかけた。

「そこにいるのは分かってるんだ！ いい加減隠れてないで出てき

たらどうなんだ!」

康平が叫ぶと、隠れていた人物がようやく姿を現した。

「救出成功に浮かれて私の存在に気付かないかと思いましたが……流石に超甘すぎましたか」

「遠足は帰るまでって良く言うだ……ろ!? お、お前!」

康平の前に姿を現したのは、彼がまったく想定もしていない人物だった。

「誰が相手かと思いましたが、まさか先ほどのうるさい少年だったとは超思いもみませんでした」

「お前、海奈が連れて行かれた車に乗っていた!」

「ええ、超その通りです。ああ、自己紹介がまだでしたね。あなたはあの時すでに名乗ってますからね、こちらも名乗るのが超礼儀というやつでしょう」

衝撃の展開に脳の処理が追いついていない康平であったが、その時になってようやく目の前の少女が右手に、ボロボロになって中身が飛び出している警備ロボを持っていることに気付いた。

そして次の瞬間、少女はその警備ロボを持ち上げてから落とすと、地面に落ちる直前蹴り飛ばした。

「っ!」

蹴り飛ばされたロボの残骸は、康平の想像もしない速度で康平の方へ飛んできた。

身体を左右に動かしての回避行動は間に合わない、康平は両腕を自らの身体の前でクロスさせると即席の防御の構えをとった。

バキッ！という音と共に康平の両腕に衝撃が走る。

康平の腕の壁にぶち当たったロボの残骸は、最後まで物体を一つに保っていたコード類もちぎれ、いくつかの塊となって地面に落ちた。

通常なら康平もタダでは済まないのだが、肉体強化を施してあったおかげで痛みこそ走るものの怪我は無かった。

「……おかしいですねエ。報告によると少年の能力は発火系能力ということでした。今の攻撃を発火系能力で防ぐことは超出来ないはず、報告ミスですかねエ」

「っ、テメエ！！ ずいぶんと景気のいいご挨拶じゃねーか！！」

康平が激怒すると、少女はにやっと不敵に笑った。

「まアナンにせよ、少しは楽しませてもらえそうです。おっと、まだ名乗ってませんでした。私の名前は絹旗最愛、今後ともご贖罪に」

「悪いな絹旗さん。俺はアンタみたいな暴力女は趣味じゃないんだ。ご贖罪するのは遠慮願いたいね」

康平がそう切り返すと、絹旗は「それは超残念ですねエ」と微塵

も残念がる様子もなく言うと、海奈を指さす。

「その娘を今すぐ引き渡せば、あなたに危害を加えることは超ありません。これが上層部からの最後通告だそうです。まアもつとも？ 私個人としてはこの通告はあなたに拒否ってもらった方が嬉しいんですが。そうしてもらえれば、通告を無視したということであなたと一戦交えることができます。あなた、中々出来そうですし」

「女の子にそう言ってもらえて光栄だ。俺もその通告に同意するつもりは毛頭ない。そして、君に倒されるつもりもない。君をねじ伏せて家に帰らせてもらう」

康平は両手に持っていたケースをいったんポケットにしまった。

先ほどのロボットを蹴った様子を見る限り、炎や水を操るといった遠距離攻撃が可能な能力ではないようであった。

もちろん、電気を操りロボットを反発させて飛ばしてきたという可能性もあるし、念動力で飛ばしてきたのかもしれない。

しかしいずれにせよ、相手の能力レベルが低くは無ということ、能力者と対峙したことのない康平から見ても明らかであった。

「（相手が能力者じゃなかったなら、炎や水の魔術で一掃することも簡単だったんだろうけど……相手が能力者、それもそれなりに強いとなると、こっちの手の内を簡単に明かすわけにはいかない。まずは接近戦で様子見だな）」

康平は耳にはめていたイヤホンのスイッチを切り替える。

携帯と連動しているイヤホンのスイッチが切り替わったことにより、自動的に通話モードへと移行した。

「もしもし、初春さん？」

康平が電話したのは先ほどまで話していた初春であった。

『はい？　どうかしましたか？』

初春の声がはっきりと聞こえてきたことに安堵を覚えた康平は、相手に悟られないように小声で話す。

「実は今、俺の前に能力者がいる。初春さんも見ただろうけど、海奈が連れ去られた車に乗っていた女の子のうちの一人だ」

『ええ！？　ど、どういことですか！？』

「分からない。でも、俺を排除して海奈を連れ帰るのが彼女に与えられた仕事らしい」

『そ、そんな……』

「そこで初春さんに追加でお願いしたいことがあるんだ」

『その女の子の能力の詳細……ですよね？』

初春も会話の流れから想像がついていたのか、康平が言う前に自ら答えを言った。

「流石初春さん。彼女の名前は絹旗最愛。漢字は良く分からないけ

ど、^{バンク}書庫から検索できる？」

「ええっと、きぬはたさいあいですか？ 読みさえ分かれば検索は可能だと思います。今から書庫に接続して検索するので少し時間がかかりますが……大丈夫ですか？」

「ああ、それくらい持ちこたえてみせるさ」

康平はそう答えると、キツと絹旗を睨みつける。

「超覚悟は決まりましたか？」

「ああ、そんなもんとくに決まってるぜ？ 海奈を絶対に連れて帰るっていう覚悟がな！！」

刹那、康平は絹旗目がけて一気に駆け出す。

本来なら何歩も足を地面につけなければならぬ両者の距離、しかし、肉体強化を施してある康平にとっては二歩の着地で十分であった。

常人ではありえないスピードで一気に絹旗との距離を詰めた康平は、右の拳を握りしめ、勢いそのままに絹旗の腹部目がけてパンチを繰り出した。

いくら当人たちが子供とはいえ、通常ならば腹部への強打は避けるべきことである。

まして相手は女の子、攻撃を繰り出すのは男の子、康平にもためらいが無かったわけではない。

しかし、これはあつてはいけない確証だが、康平にはこの攻撃が通らない確証があつた。

重たい警備口ボを、蹴り一つで尋常ならざるスピードで飛ばせる少女にパンチの一撃など通るはずがない、康平はそう思っていた。

むしろ康平がこの攻撃を繰り出した意味は、相手がどうやってこの攻撃を避けるかであつた。

腹部への強打は食らえばかなりのダメージとなる。

康平の狙いは、相手の攻撃を避ける一連の流れから、初春の情報を待たずして能力を知ることにあつた。

「（さあ、どうする！）」

康平の拳はまっすぐ絹旗の腹部を狙う……しかし、絹旗に避ける様子はまったくない。

そして、康平の攻撃はそのまま絹旗を襲つた。

「（こつちの動きが速くて避けられなかった！？ いや、そんなはずは……）」

康平が慌てて絹旗との距離を取ろうと後ろに下がろうとしたその時、それまで静止を貫いていた絹旗が動いた。

彼女も右手に握りこぶしを作ると、お返しとばかりに康平の腹部にパンチを繰り出したのだ。

「ぐはあっ！！！」

なすすべなく康平は後方へと吹き飛ばされ、背中から地面に叩きつけられた。

腹部から全身に今まで感じたことのないほどの強烈な痛みが走り、吐き気も催す。

康平はポケットに手を突っ込むと、水のクレストが2枚入っているケースに手を触れた。

飛びそうになる意識を何とか保ち、クレストケースに魔力を込めて、先ほど海奈にかけた回復魔術を自らにも施した。

痛みで集中力が普段よりもずっと低くなっていたため回復魔術の威力もかなり弱くなっていたのだが、それでも痛みを弱め吐き気をかき消すことができた。

「（こ、こういうとき魔術は能力と違って複数使えるから便利だぜ…… それにしても、なんだ、今の攻撃は！？）」

康平は先ほどの絹旗への攻撃、そしてそのお返しとばかりに受けた攻撃に違和感を感じていた。

「（あいつを殴ったとき、身体に触れた感触がしなかった…… 攻撃を受けた時も、拳で殴られた感触がしなかった）」

少なくとも、単純な肉体強化系の能力ではないことは明らかであった。

しかし、魔術の知識ならそれなりにある康平だが能力についてはさほど詳しくない。

「（くそ、分からねえ！！ 前準備なしの書庫へのアクセスには時間がかかるだろうから、もう少しは初春さんからの情報はあてにできない……攻撃を食らわないようにするしかねえ！！）」

回復魔術を施したとはいえ、康平の体力は完全に回復した訳ではない。

次の一撃をまともに食らえば意識を刈り取られる可能性も十分にある。

つまり、今の康平が採れる策は攻撃を食らわないように回避に専念することだけであった。

「おや、さっきまでの威勢のよさはどこに行っちゃったんでしょうかねエ？ そんなンじゃ、彼女を連れて帰ることなんて出来やしませんよ？」

一方の絹旗は余裕の表情で康平との距離を詰める。

「（くそっ！！ 何か、彼女を足止めできる方法は……！！？）」

そう思ったその時、康平の視線にあるものが入ってきた。

「（……！！ これを使えば！！）」

康平は痛みをこらえてバツと立ち上がると、先ほど絹旗が投げつ

けてきてバラバラになった警備ロボの残骸の一つを掴むと、それを絹旗にむけて投げつけた。

残骸は絹旗にぶつかり、バキツという音を立てて完全に粉々になった。

「パンチすら効かなかったのに、そんなもので私を超どうこうしようなどと思ったんですか？」

当然のごとく、絹旗は無傷だ。

しかし、康平の狙いは残骸で傷を負わせることではなかった。

「へっ、絹旗さん、自分の周りをよく見てみな」

康平にそう言われて絹旗が下を見ると、ぶつかった残骸がさらに細かな破片となって散らばっていた……のだが、それだけではなかった。

絹旗の周囲の地面が濡れており、気化した液体からは鼻を刺すような臭いも感じ取れた。

「絹旗さん、あんたがどこからか持ってきたその警備ロボ、旧型のものらしいな。新型のロボは電気で動くらしいが、旧型は油を使うみたいだな？」

「それがどうしたってんですか？」

「悪いな絹旗さん、俺はそこらの能力者とは違ってね……　こんなこともできるのさ……！」

康平はそう叫ぶと同時にポケットから炎のクレストが入ったケースを取り出した。

直後、絹旗の足元から突如炎が現われ絹旗を包み込んだ。

これが康平の狙いだった。

単純に炎で絹旗を包み込むことは、魔術を発動しっぱしにすれば事足りる。

しかし今の康平はダメージを受けており、魔術を長時間使い続けることは後の戦況において不利となりうる。

そこで康平が目をつけたのが、ロボの燃料タンクであった。

燃料を絹旗の周囲にまき散らし着火させれば、魔術を使い続けなくとも炎で包み込むことができる。

「（さあ、流石に炎に巻かれればどうだ！！　これでなお動くつてのは難しいぜ！？）」

しかし、現実とはそう簡単に上手くいくものではない。

「へエ……あなた、パンチの攻撃力を増したり移動を速くしたり炎

を出してみたり…… ずいぶん色んなことができるんですね?」

炎の中に人型のシルエットが浮かび上がる。

それは徐々に康平の方へと近づいていた。

「……は? おいおい、マジかよ……」

これには流石の康平も驚きを禁じ得なかった。

「まさか、伝説の多重能力者……? いや、流石にそれはないはず。俄然興味が湧いてきました。それはもう、愉快的死体オブジェに変えちまうのが勿体ないくらいに」

そう言って浮かび上がった絹旗最愛は、康平が恐怖のあまり顔をそむけたくなるほどの凶悪な表情だった

魔術師 vs 能力者（後書き）

康平、初の対能力者戦闘の相手が絹旗とは……彼の今後がいかにかに壮絶かがよく分かる展開ですね（果たして壮絶なものになるのかどうか……）

回復魔術があるということで、一見したら康平は実質無敵じゃないかと思ってしまうですが、そんなことはありません。魔術は扱える幅が広いのでバランスブレイカーにならないよう試行錯誤の連続です。それも楽しいのですがw

絹旗の口調もちゃんと『彼』の影響を受けています。まさか、あの可愛い絹旗ちゃんが能力使うとあんなになっちゃうなんて……でも絹旗可愛い。

さて次回、康平の運命やいかに!?

感想等ありましたら、いつでもお寄せください。

戦いの行方

「ど、どうなってるんだ……?」

逆巻く炎の中からゆっくりと歩いて出てきた絹旗を見て康平は愕然とした。

肉体強化を施したパンチが効かなかった時点ですでに嫌な予感がしていたしていた康平であったが、よもや炎も通用しないとは考えもいなかった。

「(一体、どんな能力を使えばこんなことが出来るってんだ!?)
俺はとんでもない高位能力者を相手にしてるんじゃないのか!?)」

『康平さん、書庫へのアクセス、成功しました!』

初春からの通信、本来なら相手の能力の詳細が分かるため喜ばしいことなのであるが、今の康平にとっては相手の強さを思い知らされる、死の宣告にも等しい通信となっていた。

「あ、ありがと初春さん。そ、それで……?」

恐る恐る訊ねる康平。

『えーつとですね…… 絹旗最愛、歳は私や康平さんと同い年で、能力は空気中の窒素を操ることができるものみたいですね。レベル3です』

「レベル3だと!?!」

初春からの報告に康平は再び愕然とした。

『は、はい、書庫には確かにレベル3とありますよ？ どうかしましたか？』

「（おかしい…… 窒素を操るっていうのは納得ができる。多分窒素を操って壁みたいに展開すればパンチは防げるし、それを攻撃にも応用できるかもしれない。けど、レベル3ってのは納得できねえ！！ 炎まで防げるのにレベル3ってことはないはずだ！！）」

単純に書庫のデータが古くて誤っているとも考えられるが、康平には別に気にかかることがあった。

「そういえば…… 絹旗ってそもそもどうしてここにいたんだっけ？」
我ながら今更だな、と思いつつ思い返してみる康平。そして、一つの答えにたどり着いた。

「実験…… まさか、書庫のデータと実際の強さが違うように見えるのは、絹旗の受けた実験が原因か！？」

「その通り」

炎から無傷で完全に脱出した絹旗が、手を握ったり開いたりしながら答えた。

「今の私はレベル4すら名乗れるほど強くなつてると思いますよ？」

「一体どんな実験をすればそんなことが可能になるってんだ！？」

「そうですねエ…… 本来ならあなたに教える義理なんて少しも無いんですが、特別に教えてあげましょう。とは言っても、難しい講釈をたれるつもりもありませんので簡潔に言おうと、私の能力に学園都市第一位の演算パターンを組み込んであるんですよ」

「学園都市第一位の、演算パターン……」

『そ、そんなことができるんでしょうか……』

康平たちのやり取りを聞いていた初春がそう言葉を漏らした。

「ええ。私に組み込まれたのは第一位の持つ『自動防御能力』です。連中いわく、攻撃を受けたとき私の意志に関係なく自動的に『窒素の壁』が身体の周囲に展開されるってことらしいですよ？」

「……なるほど？ だから炎も効かなかったのか」

絹旗の説明を聞いてすべての謎が解けた康平であったが、認めることは到底できなかった。

絹旗の言葉が正しければ、康平は劣化版とはいえ疑似的にレベル5の第一位と戦っているということになるからだ。

少なくとも、防御性能においては相手は学園都市第一位に匹敵する。

「（やっぱりとんでもない奴を相手にしてることになるのか……あれ？）」

『そついえば康平さん、その絹旗っていう人以外にもう一人いましたよね？』

「ああ、俺も今それを考えていたところ。流石に2対1は避けたいんだけど……」

「ああ、あなたが車の中で見たもう一人なら来ませんよ？ 何でも調整に手間取っているらしく、とても動かせる状態にないとか」

「そりゃ良かった……って、一人でも十分俺の手に余りそうなんだが」

康平が生きて海奈を連れて帰るには絹旗を倒すしか方法は無い。

しかしそのためには絹旗に最低でも1撃、攻撃を通さなければならぬ。

「（どうする……？ 確か窒素っていうのは空気の中でも1番量が多い物質だったよな。窒素の無いところで戦おうたってそんな場所ねえし……）」

『康平さん、彼女の周りを纏っている窒素をはぎ取れるくらいに強力な攻撃をすれば、もしかしたらイケるかもしれません。可能ですか？』

「それほどに強い攻撃が出来るならとつくに試してるさ」

康平の持ち合わせている炎と水による攻撃はまず通らない。

加えて肉体強化による物理攻撃も通らないとなると康平に攻撃の

手段はない。

紋章術は、紋章の組み合わせによる多彩な攻撃・防御がメリットではあるが、反面その威力や効果は術者の魔力に大きく依存するという性質も持ち合わせている。

まだ半人前、あるいはそれ以下の力しかない康平では、仮にすべての紋章が扱えたとしても威力に乏しく勝ち目はない。

「どうします？ 勝てないと諦めてあの子を引き渡しますか？ 私としてももつと戦いたい気持ちはありますが、本来の役割を忘れるほど愚かではないので」

「諦める？ 冗談じゃない。この世の中完璧なんてことはない。必ず方法はある。俺はそれを見つけて君を倒し、海奈を連れ帰る！！」

「往生際が悪いつていうのはまさにそういうことを言うんです。ならこちららも超手加減しません！！」

絹旗は康平との間合いを一気に詰める。

康平には先ほどの一撃による蓄積ダメージがある。

「（彼女の考えていることは単純、俺にもう一撃加えることだ。それだけで恐らく俺をダウンさせることが出来る。避けながら策を模索する俺とは違って簡単な分迷いが無い）」

康平は絹旗の右ストレートを後ろに跳躍して避ける。

絹旗は続けて距離を詰めると再び右ストレートを繰り出す。

後ろに電気柵がせまっつていてこれ以上後ろに下がれなかった康平は、今度は右に転がるように避けた。

「くそっ……」

1撃も食らえない康平はなかなか攻撃に移れない。

「なんですかア！？ 逃げてばかりじゃ何も変わりませんよオ！！」
「？」

絹旗は残虐な笑みを浮かべながら康平の手を踏みつけようとする。

康平は慌てて手をひっこめると立ち上がり絹旗との距離を取る。

「（な、なんか性格まで凶暴になってないか！？ 最初に会った時から言葉は悪いと思ったけど、今は俺を殺そうとしているようにも見えるぞ！？）」

絹旗の変化に戸惑いながら、康平は左右を見渡す。

「（俺を殺そうとすら思っている相手に生半可な対応じゃ間違いないかな！）」
「（こうなったらこっちも相手を叩き潰す気持ちでいかなー！）」

しかし、素の状態では絹旗には敵わない。

そこで康平が思いついたのは、周囲のものを利用することだった。

「（何か……何か打開策を見いだせそうな物は！？）」

ところがそこは研究所の施設内、元から設置物など多くなく、あっても施設の内部とつながっているものばかりなため迂闊に引き抜いたり壊したりする訳にはいかなかった。

「（外灯をぶっこ抜いて振り回したって彼女には傷一つ負わせられない。車も同じだ。くそっ！！ 施設の外に誘導するって手もあるけど海奈から離れる訳にはいかないし…… ん？ あれは……）」

康平の目に入ってきたもの、それは貯水槽であった。

「（あの大量に溜まった水を使っても彼女をどうこう出来そうにはない…… いや、待てよ！？）」

康平の脳内に一つの可能性が生まれた。

康平は絹旗の繰り出してきた蹴りをかわすと貯水槽のところまで走った。

そしてポケットから水の紋章が入ったクレストケースを取り出すと顔の前に掲げ、目を閉じた。

傍からみれば無防備な状態、絹旗が見逃すはずがない。

「祈りをささげて助かろうなんて超思っちゃいませんよねー！！ そんなことしても超無駄ですよー！！」

勝利を確信した表情で一気に康平に詰め寄る絹旗。

絹旗の右こぶしが康平の意識を刈り取らんと振るわれる。

しかしその右手が康平の顔面に触れる直前、康平の前に絹旗を阻むかの如く青に光る魔法陣が浮かび上がった。

そして次の瞬間、魔法陣からものすごい勢いで水流が噴射され絹旗を直撃した。

絹旗は水流に押されたまま後方へと吹き飛ばされ、そのまま建物の壁に激突した。

相当な衝撃でぶつかつたことを物語るかのごとく壁はパラパラとひび割れ、絹旗はズルズルと壁に沿って地面に崩れ落ちた。

なんと、壁には少量ではあるが血がにじんでいた。

康平の放つた水流が絹旗の室素の壁をわずかながら貫通した証であった。

「（う、上手くいったみたいだな…… 紋章術の基礎事項、忘れるところだったぜ）」

炎では破れなかつた室素の壁がなぜ水流では崩せたのか、それは紋章術のある特性を康平が利用したからであった。

紋章術の持つ特性、それは『術者のいる場所によって魔術の威力が変わる』というものであった。

紋章魔術の威力は術者の魔力もさることながら、術者の周囲の魔術的環境によっても左右される。

そこは『レイライン』、あるいはそのライン同士が交差する点と
いうことで『レイポイント』とも呼ばれるが、ともかく属性の濃度
が濃い場所のことである。

今回の場合、貯水槽という「水の要素の濃度が濃い」場所で水の
紋章を使った魔術を行使したため、通常より威力が増大し絹旗の窒
素の壁を通り抜けてダメージを与えることが出来たのである。

レイライン、またはレイポイントもそうだが、本来は自然に存在
するものを指す。

川、山、森などがその代表例である。

しかしそんな中でも炎は例外である。

炎は自然にはレイライン、レイポイントがほとんど存在しないか
らである。

火は自然界にほとんど存在せず、人間が意図的に起こすものだけ
らである。

逆に言うとレイラインの概念を理解できずとも扱うことができる
ため、基本的に紋章術師が真つ先に習得するのは炎の魔術である。
（一応、水辺の近くでは弱まるということだけは覚える必要がある
が）

今回の場合、康平は貯水槽を『池のように水が溜まった場所』疑
似的なレイポイント』と見立てたのである。

「（学園都市は人工物が多すぎてなかなか練習する機会も無かった

けど、上手くいったな。これで結構ダメージを与えられたはずだ
けど……）」

出血があるということはダメージは少なくない。

出来ればこのまま絹旗に動いてほしくない康平だが……

絹旗の手がピクリと動き、彼女の手に乗っていた瓦礫がガラガラ
と地面に落ちた。

「（ッ！？ まだ動くか！？）」

再び構える康平。

絹旗はフラフラと立ち上がる。

しかし直後、康平が予想だにしていなかったことが起きた。

コンクリートの壁に打ちつけられ、あまつさえ出血もしている絹
旗がこれまでと遜色ないスピードで走り出すとものすごい跳躍を見
せ、一気に康平の所まで到達すると地面に打ち付けた。

「がぁっ！！」

よもやこのような機敏な動きが出来るとは思ってもいなかった康
平は為すすべなく押さえこまれた。

「（しまった！！ クレストケースが！？）」

地面に押さえつけられたとき康平はケースを手放してしまっていた。

右手のすぐ近くにケースが落ちていることを確認した康平はそれを取ろうと手を伸ばす。

その動きを絹旗は見逃さず、左の拳で康平の右手を殴りつけた。

「ああああああっ！！！！」

室素の壁と地面に挟まれた康平の右手から骨の折れる音が響いた。

『康平さん！？ どうかしたんですか！？』

康平の悲鳴を聞いた初春が呼びかけるが、康平に答えるだけの余裕は無い。

骨を折られた右手は熱を持ち、まともに動かせる状態ではない。

唯一の希望の光である回復魔法も、水の紋章の入ったケースが飛ばされてしまったので使えない。

炎の紋章が入ったケースはポケットの中だが、炎では絹旗にダメージを与えることはできない。

立場は完全に逆転した。

「（ま、マズイ……けど、どうしようもねえ！！！！）」

身をよじって何とか脱出を試みる康平の目の前で絹旗は右手を握りしめると、康平の顔の正面に構えた。

目は見開き息は荒く、とても正常な状態には見えない。

「（今の絹旗の精神状態はかなりヤバい！ 多分、次の一撃に一切の手抜きはない……今度こそやられる！！）」

右手の骨を折るほどの攻撃を頭部に受けて無事でいられる可能性はまず無い。

康平にできることは目をつむることしかなかった。

「超死になさい！！」

拳が空を切る音が康平の耳に入り、そして

「があああああっ！！！！」

「っ！？」

突如絹旗が苦痛に満ちた悲鳴をあげ始めた。

康平の頭を砕くはずだった拳は、康平の顔の左の地面を叩いていた。

「な、なんだ!？」

絹旗は左手で頭を押さえながら康平の身体の上に倒れこんできた。

『今の悲鳴は!？ 康平さん、無事なんですか!？』

「あ、ああ、俺は無事だよ初春さん。今のは絹旗があげた悲鳴だ」

『絹旗さんが？ 康平さんが何かしたんですか?』

「いや、俺は何もしてない。彼女が突然頭を押さえたかと思うと俺の上に倒れてきて……」

「くっ……!! こんなときに……!!」

絹旗は何か立ち上がるうとするが、身体は震えるばかりでいっこうに立ち上がれない。

康平は身体の上の絹旗をどかすと、左手でクレストケースを拾い自らに回復魔術をかける。

しかし右手が伝える激痛で集中力が保てず、ほとんど効力は無かった。

「だ、ダメか…… それにしても、絹旗に一体何が……」

「知りたいか、小僧?」

突如聞こえてきた男の声に康平は振り向こうとするが、頭の後ろにガチリ、と硬いものを押し付けられた。

「動くなよ？ 動くと言わなく撃つ」

男はそう言っただけで康平の頭に銃を押し付けながら、もう片方の手で絹旗を担ぎ上げた。

「ふむ…… 黒夜と違って適応度はかなり高かったのだがな……
やはり、一度程度の調整では無理があったか」

「調整？ 適応？」

「絹旗がおかしくなったのは、彼女の元々持ち合わせていた室素を操る能力の演算と、植えつけた第一位の演算パターンとの間で相互干渉が起きたからだ。彼女の適応度なら一度の調整で上手くいくと踏んで早速実戦投入させたわけだ」

「その相手が俺ってことか。アンタは、海奈を連れ去っていった連中と同じ連中なのか？」

「いや、違う。私の担当は絹旗と黒夜に第一位の演算パターンを植え込む実験だ。君が忍び込んだ施設の連中は原石の能力を解明することを目的にしていた。たまたま実験開始が同じ日だったため一緒に連れてきただけのことだ」

「黒夜ってのは…… 今の話の流れからすると、イルカのビニール人形を持っていた子か」

「その通り。……さて、無駄話はそろそろ終わりだ」

「俺を殺すのか？」

「そうだ……と言いたいところだが、君も随分興味深い存在だな。絹旗との戦いの一部始終、見させてもらったよ。……君は一体、何者だ？」

『っ……っ』

男の質問に、電話の奥の初春が息をのんだ。

「アンタに答える義理は無い」

「フツ、別に答えてもらわなくとも構わない。ここは学園都市、調べる手段などいくらでもある。さあ、立て」

男の指図に従い立ち上がりながら、康平はポケットの中のケースに触れる。しかし……

「（ダメだ。今ここでヤツを攻撃すれば、間違いなく絹旗にも当たる。それは出来ない）」

康平が絹旗と戦ったのはあくまで海奈を助けるため、立ちほだかる絹旗を戦闘不能に追い込むためであった。

途中油を使って絹旗を火だるまにしようとしたが、あれも絹旗が動けなくなつたと見るや水の魔術で助けるつもりであったし、殺す気など最初から無かった。

しかし今の絹旗は、男が何の抵抗もなく担ぎ上げたところから見るに、無自覚に発動する窒素の壁も展開出来ていないようであった。

攻撃すれば間違いなく絹旗にも飛び火する。

「よし、素直で結構。そのまま真っ直ぐ歩け」

「(ダメだ、策が無い。振り返って直接攻撃するにしても男の銃の方が速い。絹旗を巻き添えにするしかないのか……!?)」

しかしここで行動を起こさなければ絹旗はもちろん、海奈、康平自身、そして康平に協力していた初春までもが危険にさらされることになる。

「(やるしか……ないのか。くそっ!!)」

覚悟を決めた康平はクレストに魔力を込め、炎の魔術を発動させようとした。

ところが

「……あれは、私の獲物です。……横取りなんて、超許しません!」

「ぐへあっ!!」

「!?!」

突然聞こえてきた男の叫び声に康平が振り向くと、動けなくなっていたはずの絹旗がいつの間にか復活しており、彼女を運んでいた男の顔面に肘鉄を食らわせていた。

その一撃で意識を失ったのか、男はそのまま後ろに倒れた。

「なっ……………」

康平は訳が分からずその場に立ち尽くした。

先ほどの男の会話が正しければ、絹旗は男の仲間ということになる。

その仲間であるはずの絹旗が、なぜ男を気絶させたのか？

「……………超意味が分からないって顔してますね」

「あ、当たり前だ。一体どういっつもりなんだ？」

「さっきも超言ったじゃないですか、『私の獲物』だと。あなたを倒すのは他の誰でもない、この絹旗最愛だということですよ」

「……………意味が分からないんだが？」

康平がそう言うと、絹旗は座ったままフツと笑った。

「第一位の演算パターンを植え込まれる前から、私は窒素を操れるレベル3の能力者でした。自動防御など無くとも、窒素の超一撃で私は置き去りの施設の中で一番上に立っていたんです」

「……………」

「そんな折、私に今回の実験の話が飛び込んできました。世間の人

間から見ればレベル3でも十分な能力の持ち主として見られますが、私は捨てられた身。当然収入は奨学金のみ。ならば、さらに強い力を手に入れようと考えるのは自然な考えでしょう?」

「確かに、学園都市からの奨学金はレベルの強度で変わるからな、分からなくはない。だけど、そのために命の危険を冒してまで自分の身体をいじるか? 死んだらそれまでなんだぞ? だったらレベル3の奨学金でも十分じゃないのか?」

「……………」

「絹旗?」

康平の質問を聞いた絹旗の表情が、苦虫をかみつぶしたようになった。

「……………超先ほども言いましたが、私は置き去りです。私を捨てた両親を、当然恨んでいます。彼らを見返したいというわけではありませんが、どうせ学園都市に捨てられ、レベル3の能力者にまでなれたのだからもつと強くなりたい、そのチャンスが私にはある……………超そついうことです」

「……………そうか」

この時康平は、絹旗に少し同情出来た。

彼の父親は康平を捨てたわけではないが、結果として康平を学園都市に“置き去り”にした。

それが全国の魔術師から追われている息子を助けるための苦肉の

策だということも、康平は理解している。

しかしそれでも、息子として、共に追われている身として「父親のそばにいたい」とも思っている。

そしてそれをさせてくれなかった父親を康平は多少なりとも恨んでいる。

「超話を戻します。ともかく私は学園都市最強の人間の演算パターンを手に入れた。例え一部でも、最強を真似ることが出来るようになった。調整が終わって機械を外されたとき私はそう確信しました」

「……なるほど。そうやって勇んで俺の前に現れた。でも結果として窒素の壁を破られ壁に叩きつけられた」

「超その通りです。だから私は、あなたを『獲物』にしたんです。いつか、あなたを倒せるように」

「その倒すつてのは、殺すつてことじゃないだろうな？ さっき俺の顔面殴ろうとしたとき『超死になさい』って言ってたし……」

康平が顔をひきつらせながら訊ねると、絹旗は「ああ……」とそのシーンを思い出す。

「あれは本心ではありません。私も超詳しくは分かりませんが、興奮が高まると私以外の人格が浮かび上がってくるみたいなんです。もしかしたら、植えつけられた第一位の演算パターンが私の人格にも影響を与えるのかもしれない」

「この学園都市の最強は、そんなに恐ろしいことを平気でやりそう

な奴ってことか……出会いたくねえな。……って待てよ？ だとすると、次に絹旗に出会って戦って、興奮状態になったらまた殺しにかかるってことか!？」

「次に出会うときまでにはさらに調整を進めて、コントロールできるように超しておきますよ。あ、あなたの名前を知っているからといってこちらから出向くことは超ありませんのでご安心を。何となくですが、あなたとは何もせずとも勝手に出会うような気がするので」

絹旗がそう言ってニコツと笑うと、康平は「ハハ……それはご遠慮願いたいな」と苦笑いしながら絹旗の前にしゃがみ込むと、絹旗の額に手を当てた。

すると指先が輝き、絹旗を光が包み込んだ。

「? 何を……」

「少しは身体が軽くなっただろ？ 今の光は絹旗の身体の傷を少し治してくれたはずだ。もつとも、俺も右手の骨がバラバラになってるせいで痛くて痛くて、効き目はかなり弱まっちゃってるだろうけどな」

そう言つと康平は立ち上がった。

「そんなことまで……あなた、本当に何者なんですか？ それに、何でそんなことをしてくれたんですか？」

絹旗の質問に、今度は康平がフツと笑った。

「残念だけど、最初の質問には答えられない。次の質問の答えだけど、『お礼』かな。さっきそいつに肘鉄して助けてくれたろ？ さ、また面倒に巻き込まれる前に帰るとしますか。じゃあな」

康平は後ろ手に手を振りながら、海奈の所へ歩いて行った。

絹旗は少しのあいだポカンとしていたが、やがて「……超バカですな」と呟いた。

「あなたを助けたのは、あなたを『獲物として』とっておきたかったからです。そんな言わば敵である私の傷を癒すなんて、馬鹿にも程があります」

絹旗も立ち上がる。

「……秋葉康平、でしたか。その名前、しかと心に刻みましたよ？」

そう言って、自らが調整を受けた施設へと戻って行った。

戦いの行方（後書き）

ふむ……二人の熱いバトルを期待していた方にとっては、少々物足りない結末になってしまった感があります。

一応、これが目指していた形なのでこれでご容赦頂けると幸いです。

それにしても、記念すべき康平の初仕事の結末が右手骨折……命がいくつあっても足りないんじゃないんじゃ……w

今後の絹旗の絡みが気になるところではありますが一旦それはさておき、次話、海奈救出編最終話です。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3910s/>

とある少女と紋章術師

2011年10月31日01時15分発行